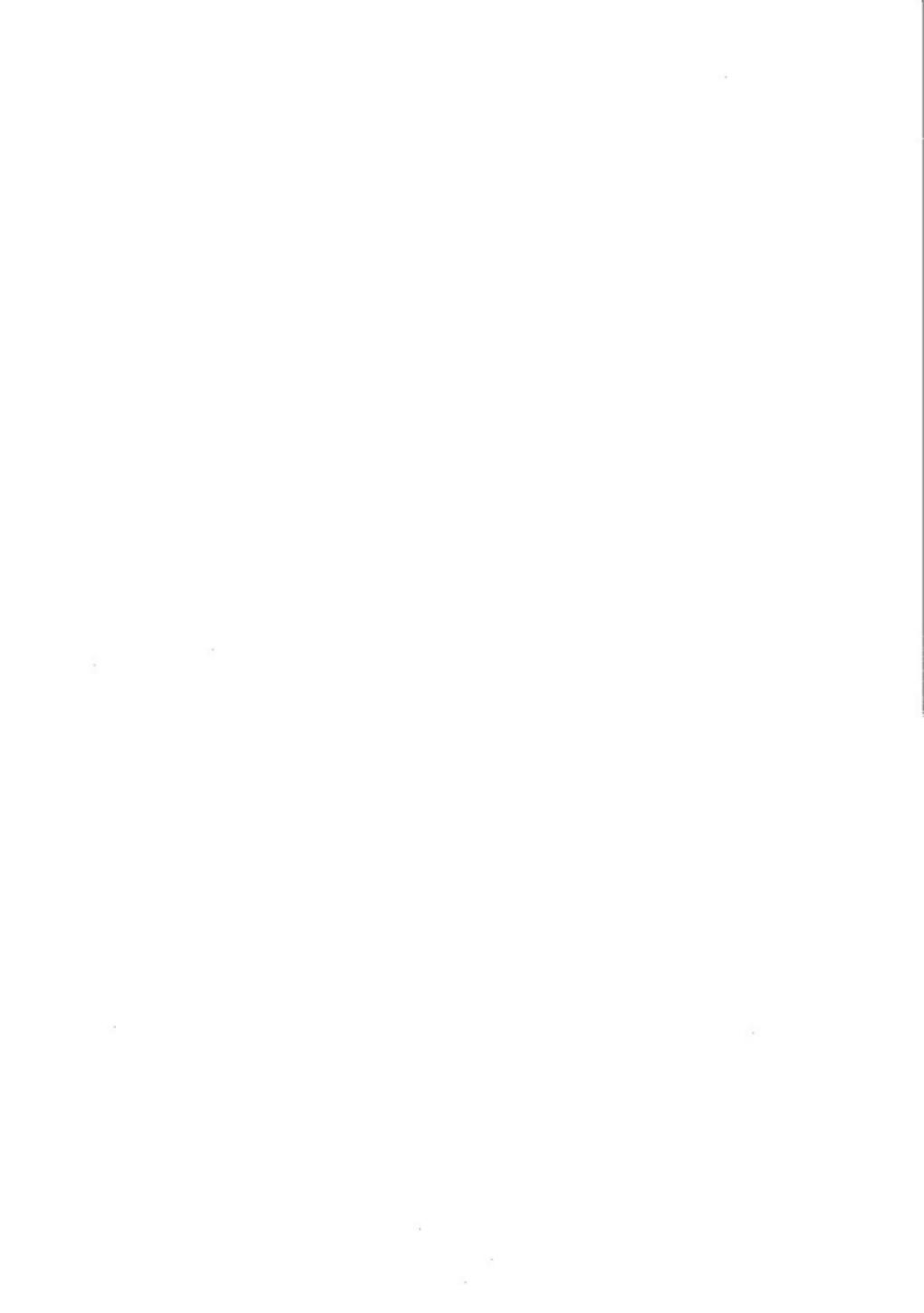


財團法人八尾市文化財調査研究会報告71

- I 恩智遺跡（第8次調査）
- II 恩智遺跡（第9次調査）
- III 亀井遺跡（第11次調査）
- IV 心合寺山古墳（第5次調査）
- V 中田遺跡（第46次調査）
- VI 東弓削遺跡（第11次調査）
- VII 宮町遺跡（第3次調査）
- VIII 山賀遺跡（第11次調査）

2001年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



# 財團法人八尾市文化財調査研究会報告71

- I 恩智遺跡（第8次調査）
- II 恩智遺跡（第9次調査）
- III 亀井遺跡（第11次調査）
- IV 心合寺山古墳（第5次調査）
- V 中田遺跡（第46次調査）
- VI 東弓削遺跡（第11次調査）
- VII 宮町遺跡（第3次調査）
- VIII 山賀遺跡（第11次調査）

2001年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、旧大和川が形成した河内平野のほぼ中心部に位置しております。古くから人々の生活の場として適した地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く残っております。

近年の開発工事の増加によって文化財を破壊から守り、記録保存し後世に伝承することが私共の責務であると認識しております。そこで私共では、破壊され消滅する危険にさらされている埋蔵文化財を、後世に永く伝えるため事業者の御協力を仰ぎ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第であります。

今回、平成12年度と平成13年度初めに実施しました公共下水道工事・堤体改修工事に伴う発掘調査の整理が完了しましたので、報告書として刊行することに致しました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝すると共に、発掘調査や整理作業に従事された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成13年9月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 木山丈司

# 序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成12年度と平成13年度初めに実施した発掘調査成果の報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成13年9月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
  1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・IIが岡田清一、IIIが成海佳子、IVが酒 斎、V～VIIが高萩千秋である。全体の構成・編集は高萩千秋が行った。
  1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月編纂）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改訂）をもとに作成した。
  1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の標準潮位（T.P.）である。
  1. 本書で用いた方位は磁北及び国土地標（第VI系）の座標北を示している。
  1. 造構は下記の略号で示した。  
土坑-SK 溝-SD 小穴-SP 落ち込み-SO 自然河川-NR
  1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪-白・須恵器・陶磁器-黒・石製品・瓦・木製品-斜線
  1. 土色については、「新版 標準土色帖」1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
  1. 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

# 目 次

## はしがき

## 序

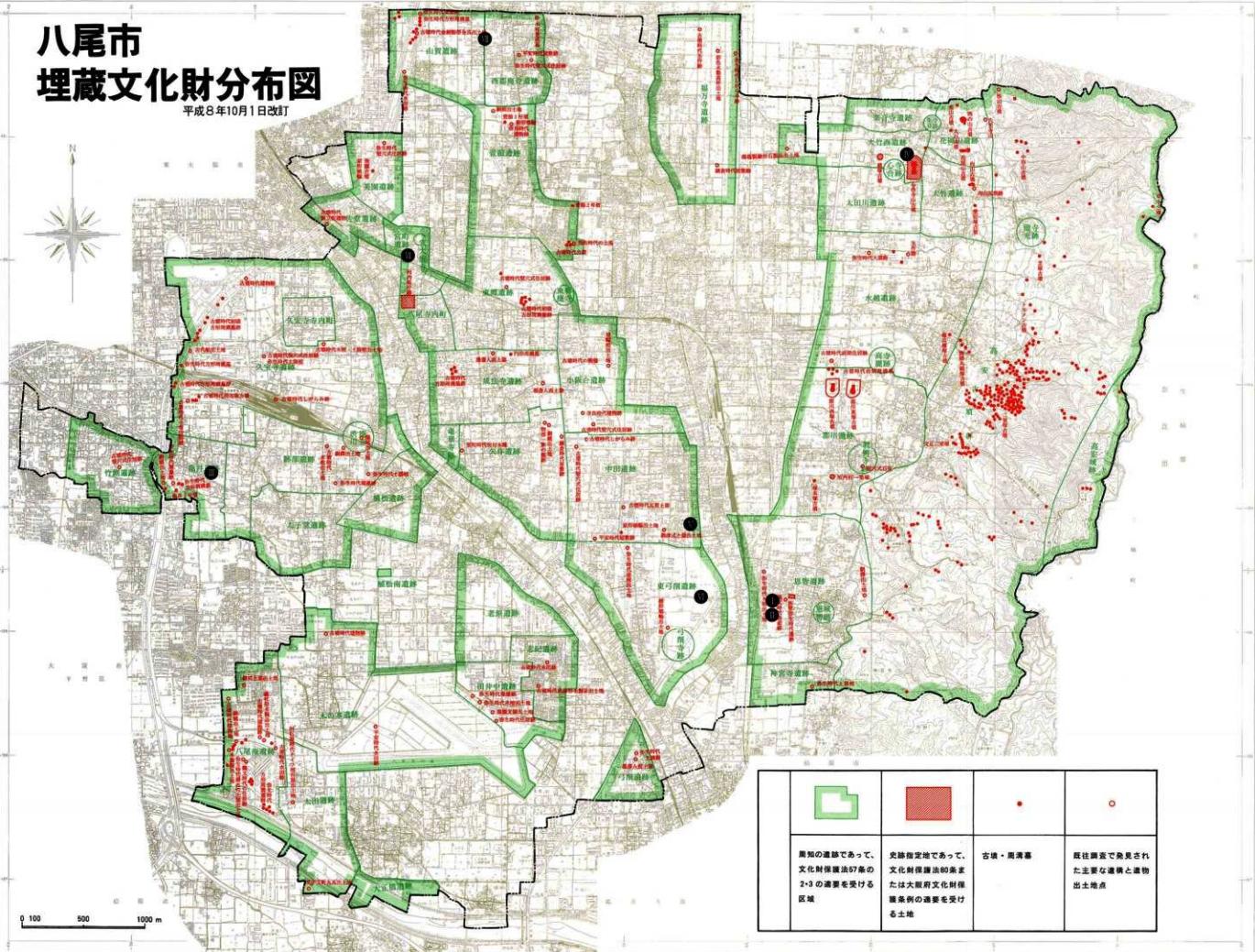
## 八尾市埋蔵文化財分布図

I 恩智遺跡 第8次調査(OJ2000-8)	1
II 恩智遺跡 第9次調査(OJ2001-9)	1
III 亀井遺跡 第11次調査(KM2001-11)	13
IV 心合寺山古墳 第5次調査(SO2000-5)	19
V 中田遺跡 第46次調査(NT2000-46)	41
VI 東弓削遺跡 第11次調査(HY2000-11)	49
VII 宮町遺跡 第3次調査(MM2000-3)	55
VIII 山賀遺跡 第11次調査(YMG2000-11)	61

報告書抄録

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



卷之三

I 恩智遺跡第8次調查（O J 2000-8）  
II 恩智遺跡第9次調查（O J 2001-9）

序 文

## 例 言

1. 本書は大阪府八尾市恩智中町2・3丁目で実施した公共下水道工事(12-45工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第8次調査(OJ2000-8)・第9次調査(OJ2001-9)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教社文第471号 平成13年1月26日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお、調査期間・調査費用の諸事情から第8次と第9次の2次に分けて協定を締結した。
1. 現地調査は、第8次調査—平成13年3月12日～3月30日(実働3日間)、第9次調査—平成13年4月2日～5月29日(実働4日間)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は両調査ともに約19m<sup>2</sup>で、総面積は約38m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査に参加した補助員は荒川和哉・柴田節子・鈴木裕治・曹 龍である。
1. 本書に関わる業務は、出土遺物のうち石器類の実測および文章については金親満夫(当調査研究会嘱託職員)の協力を得た。他は岡田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	3
1) 調査の方法と経過.....	3
2) 基本層序.....	3
3) 各調査区の概要.....	5
3.まとめ.....	7

## I 恩智遺跡第8次調査(OJ 2000-8)

## II 恩智遺跡第9次調査(OJ 2001-9)

## 1.はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する縄文時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。地理的には、生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がる。行政上の遺跡範囲は、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～4丁目、恩智南町2丁目にまたがる南北約1.2km・東西約1.0kmである。本遺跡の周辺には、北に郡川遺跡、南に神宮寺遺跡、東に高安古墳群、さらに西には玉串川を挟んで東弓削遺跡が隣接する。

本遺跡は、大正6年(1917年)に恩智中町3丁目において京都大学考古学研究室によってはじめて発掘調査が実施された。その後、昭和14年(1939年)に大阪府による調査が実施され、恩智神社のお旅所である「天王の森」を中心に広がる弥生時代の大規模な集落遺跡であることが判明した。以後も現在まで恩智川改修工事や下水道工事といった公共事業、住宅建設工事をはじめとする民間事業に伴い、瓜生堂遺跡調査会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会によって数次に亘る調査が実施されている。それらの結果、縄文時代から弥生時代を中心とする遺構および遺物が多量に検出され、本遺跡の該期の様相が徐々に明らかになってきている。



第1図 調査地周辺図および位置図(S=1/5000)

第1表 八尾市教育委員会既往調査一覧表（第1回対応）

No.	調査年	主な検出遺構・出土遺物	文 献
1	昭和49年	縄文時代晩期～弥生時代～土器	1976 山本昭・泉本知秀・福岡澄男「八尾市恩智遺跡の山」遺物』『大阪文化誌』第2巻1号（財）大阪文化財センター
2	昭和51～53年	弥生時代中期～遺構・遺物多数検出	未報告
3	昭和58年	弥生時代～土坑	1983 「八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書」
4	昭和59年	弥生時代～遺構・遺物	1985 「八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書」
5	昭和59年	弥生時代中期～斐棺・溝・ピット	同 上
6	昭和61年	縄文時代晩期～土器集積・落ち込み・小穴 縄文時代中期～弥生時代～土器・石器・動・植物遺存体	1987 「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書 I - 恩智遺跡の調査 - 」
7	昭和62年	遺構・遺物なし	1988 「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書 I (86-494) 」
8	昭和62年	弥生時代中期～土坑・小穴	同 上 (86-518)
9	昭和63年	弥生時代中期～上器・石器 古墳時代～土師器	1989 「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書 I (62-529) 」
10	昭和63年	弥生時代～古墳時代～遺物包含層	同 上 (63-361)
11	平成2年	弥生時代～ピット 弥生時代中期～土坑 弥生時代～古墳時代～土器・石器	1991 「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書 I (90-282) 」
12	平成3年	古墳時代後期～自然流路 弥生時代～古墳時代～弥生土器・上器・須恵器	1992 「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書 I (90-558) 」
13	平成3年	弥生時代中期～ピット	1992 「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書 I (91-55) 」
14	平成3年	弥生時代～土器 中世～上器・瓦器	1992 「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書 II (91-363) 」
15	平成4年	弥生時代中期～土坑状遺構 弥生時代中期～上器・石器	1993 「八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書 I (93-352) 」
16	平成7年	弥生時代中期～落ち込み状遺構	1997 「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書 I (92-640) 」
17	平成7年	弥生時代中期～後期一小穴状の落ち込み・落ち込み状遺構 弥生土器・須恵器	1996 「八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書 I (95-169) 」
18	平成8年	弥生時代中期～遺物包含層	1997 「八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書 I (96-408) 」
19	平成9年	弥生時代～中世～遺物包含層	1998 「八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書 I (96-471) 」
20	平成9年	縄文時代晩期・弥生時代中期前半～土器・石器	同 上 (96-747)
21	平成9年	弥生時代中期～溝・ピット 縄文時代後期～溝・ピット	同 上 (96-518)
22	平成9年	古墳時代後期以降～遺物包含層	同 上 (97-318)
23	平成9年	弥生時代中期・中世～遺物包含層	同 上 (96-657)
24	平成9年	弥生時代中期～溝状遺構・落ち込み 古墳時代後期以降～遺物包含層	同 上 (97-310)
25	平成10年	弥生時代中期～落ち込み状遺構	1999 「八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書 I (98-54) 」
26	平成10年	縄文時代晩期後葉～土器韋リ 弥生時代前期～溝 弥生時代中期～土坑状遺構	同 上 (98-278)
27	平成10年	弥生時代中期～遺物包含層 中世墳～河川堆積層	同 上 (98-396)

(※文献に関して、No.1以外はすべて八尾市教育委員会)

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(12-45工区)に伴うもので、当研究会が恩智遺跡内で実施した第8次調査および第9次調査にあたる。調査対象は東西幅1.0m前後、南北長約350mに伸びる市道において、立坑、人孔造設に伴い破壊される部分13箇所で、北から第1区～第13区と呼称した。このうち平成12年度に実施した第8次調査は、第1区～第3区・第7区・第10区・第12区の6箇所、平成13年度に実施した第9次調査は、第4区～第6区・第8区・第9区・第11区・第13区の7箇所である。

調査の方法について、第8次調査は「ケコム工法」と呼ばれるもので、径および高さ1.5～2.0m・厚み2cm前後を測る筒状の鉄枠を圧入機と重機を併用して鉄枠内の堆積土層を掘削・除去しながら鉄枠を溶接により繋ぎ合わせ、現地表下3～4m程度まで埋設していくものである。調査では工法上の諸事情により、平面的な調査を行うことができなかつたため、現地表から工事掘削床面までの各地層の状況を記録・撮影した。一方、第9次調査は第4区のみが先述の「ケコム工法」によるもので、それ以外はすべて一辺約1.8m四方の工事部分を調査区とし、現地表から2m前後の深さまで重機と人力を併用して掘削を進め、遺構・遺物の検出および平面・断面(地層)の記録・撮影を実施した。なお、出土遺物については調査地のみならず、残土処理場においても掘削された土塊を再度砕き、確認と採集に努めた。

出土遺物量は第8次調査と第9次調査を合わせ、全体でコンテナ(30cm×60cm×20cm)1箱分である。

### 2) 基本層序

第8次調査および第9次調査の第4区については既述したように工法上の事情から、面的に堆積状況を確認できなかつたため、掘削中に地層の変化が確認できるところで現地表からスタッフ(箱尺)を用い、各地層毎に記録をとった。したがって、その精度については不確実な要素を多分に含むものであるが、それを少しでも補う為に市下水道建設室より工事前に現地において実施された数箇所のボーリング地質資料を参考とした。

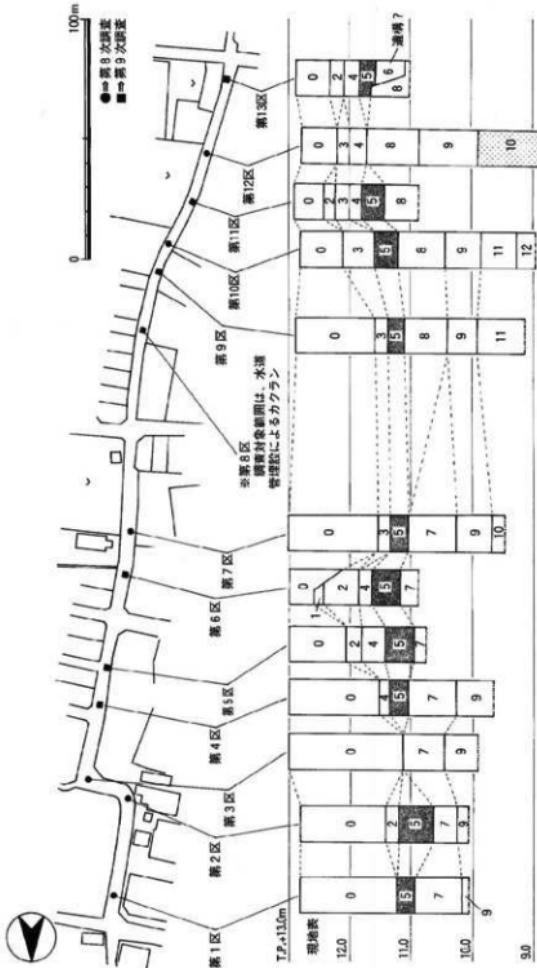
調査の結果、周辺の既往の調査から予想された弥生時代の堆積層について、第3区・第8区の2地点では、現地表(T.P.+12.9～13.0m)から1.5m前後は既にガス管および水道管埋設時に搅乱を受けていた。そして南部にあたる第12区では、古墳時代に削平を受けた可能性もあり、遺存が認められなかつた。それ以外の調査区については、概ねT.P.+11.0～11.5m間で弥生時代中期末～後期初頭に比定される堆積層を確認した。

以下、調査地全域で確認できた13層の各地層について列記する。

第0層：盛土および搅乱層。層厚0.6～1.9m。道路築造時および既述のガス管等埋設時の埋め戻し土である。

第1層：5B2/1青黒色シルト。層厚0.15m前後。第6区のみに遺存する近・現代の耕作土層である。

第2層：7.5YR4/4褐色砂質シルト。層厚0.15～0.6m。肥前系の染付磁器をはじめとする国産陶磁器の破片が少量含まれる近世相当層である。第6区に比較的厚く堆積する。



第2図 調査区位置図 (S = 1 / 200) よび地層模式図 (S = 1 / 80)

【解説】或士および砂質泥質  
第0層：或士および砂質泥質

第1層：N62/1青灰色砂質泥質 (近・現代の作土層)

第2層：N7.5FA/4褐色砂質泥質 (近世相当層)

第3層：N7.5FA/2灰褐色砂質泥質 (平安時代～中世相当層)

第4層：N84/1褐色砂質泥質 (古墳時代中期～奈良時代)

第5層：N5/0褐色灰砂質泥質 (後生時代中期～後期相当層)

第6層：N68/2/1青灰色砂質泥質 (近世相当層)

第7層：N65/1青灰色砂質泥質 (近世相当層)

第8層：N7.5GA/1青灰色砂質泥質 (近世相当層)

第9層：N7.5GA/2白色細砂質泥質 (近世相当層)

第11層：N2/01褐色砂質泥質 (近世相当層)

第12層：N68/2/2青黑色シルト

第3層：7.5YR6/2灰褐色砂礫混じりシルト。層厚0.2m前後。鉄分・マンガンの沈着が見られる。北部には見られず、南部で確認される。土師器の皿・楕・瓦器碗の小片を含むことから本層は平安時代～中世に比定されるものと思われる。

第4層：5B4/1暗青灰色粘土質シルト。層厚0.15～0.35m。須恵器(蓋杯等)を含む古墳時代中期～後期にかけての堆積層である。

第5層：N3/0暗灰色砂礫混じりシルト質粘土。層厚0.2～0.6m。2～5mmの細礫が混入する。弥生時代中期～後期にかけての遺物を含む。遺物出土量では、第5区が比較的多い。

第6層：10BG6/1青灰色砂質シルトと10BG3/1暗青灰色粘土質シルトの互層。層厚0.4m前後。堆積状況から、弥生時代後期以前の遺構内埋土、あるいは河川の氾濫による洪水砂的可能性がある。本層から遺物は検出されなかったため、時期は不明である。

第7層：5B5/1青灰色砂礫混じり粘土質シルト。層厚0.5m以上。調査地の北部にあたる第1区～第7区に堆積する。

第8層：7.5GY4/1暗緑灰色砂礫混じり粘土。層厚0.2m以上。調査地の南部にあたる第9区～第13区に堆積する。

第9層：7.5GY4/1暗緑灰色シルト質粘土。層厚0.1m以上。第12区では1m近く堆積する。シルト薄層が挟在する。

第10層：N7/0灰白色細粒砂～粗粒砂。層厚1.0m以上。第12区にのみ認められる堆積で、埋没河川を示唆する。層内から遺物は検出されず、明確な時期は不明である。

第11層：N2/0黒色砂礫混じりシルト質粘土。層厚0.2m以上。植物遺体を若干含む。

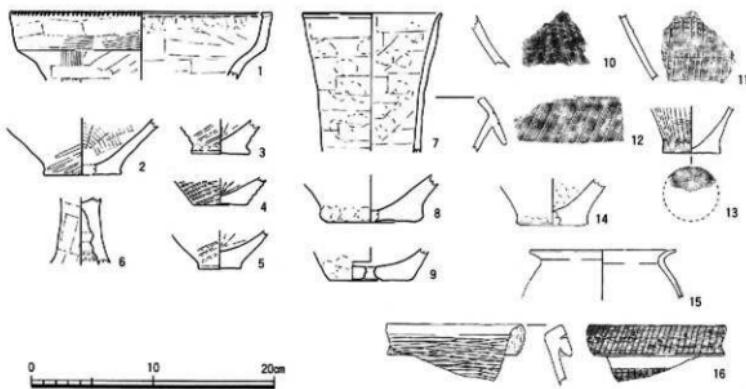
第12層：5BG2/1青黒色シルト。層厚0.3m以上。調査地南部の第10区で確認できた。

### 3) 検出遺構と出土遺物

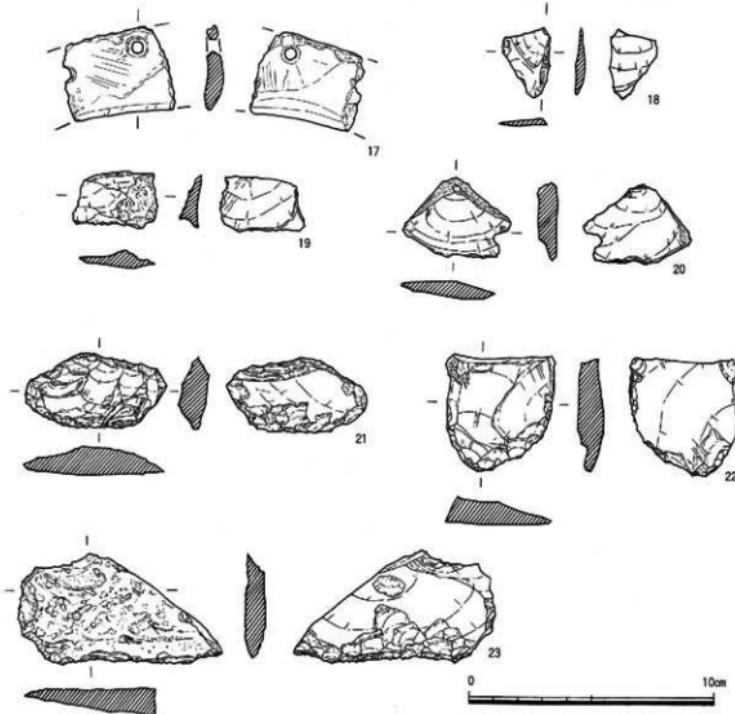
第8次調査では、既述のように工法上の諸事情から面的な調査を実施することができなかつたので、遺構については不明である。

第9次調査では、第13区の第6層が遺構内埋土となる可能性がある。面的には遺構の掘方が確認できなかつたが、地層断面の観察からは第8層上面から人為的に掘り込まれた後、第6層が堆積した様相が窺われる。第6層内から遺物は検出されなかつたが、第5層との層位関係から埋没時期は弥生時代後期以前であることが推察される。本調査区以外では、弥生時代中期～後期にかけての遺構構築層と推定される調査地北部の第7層および調査地南部の第8層の上面には土壤化が認められるが、遺構と判断される起伏や落ち込みは平・断面には見られない。しかしながら、周辺での遺構の存在が想定される。

今回の調査では、弥生時代中期～後期に比定される壺・甕・高杯のほか、サスカイトや石包丁といった石器類、古墳時代中期～後期に比定される土師器壺・須恵器蓋杯・須恵器壺および甕、平安時代～中世に比定される土師器皿・土師器碗・瓦器碗・土釜、近世では肥前系磁器・仏舎具・瓦が出土した。その中で図化できたものは、弥生時代中期～後期に比定される第5層出土の土器および石器である。調査区別に、第2区～壺(1)、第4区～石包丁(17)・サスカイト剥片(18～20)、第5区～壺(2)・甕(3～5)・高杯(6)・サスカイト製楔形石器(21～23)、第6区～壺(7・8)・甕(9)、第7区～壺(10～12)・甕(13～15)・鉢(16)である。以下、土器類につい



第3図 第5層出土遺物実測図I (S=1/4) 第2区-1、第5区-2~6、第6区-7~9、第7区-10~16



第4図 第5層出土遺物実測図II (S=1/2) 第4区-17~20 第5区-21~23

では調査区別に概説し、石器類についてはまとめて後述する。

[土器]

・第2区

1は有段の口縁をもつ広口壺で、口縁端に刻み目を施す。色調はやや橙色気味の灰白色を呈する。搬入品である可能性が考えられる。

・第5区

2は壺の底部で、外面はヘラミガキ、内面はクモの巣状にハケナデ調整を施す。3~5は壺の底部で、すべて外面右上がりのタタキ、内面はヘラナデ調整を施す。6は高杯の柱状部で、中空の内面下部に絞り目を有する。すべて弥生時代後期の所産である。

・第6区

7は長頸壺で、外反気味に長く伸びる口縁部を有し、端部は外方へ摘み上げる。内外面ともにユビオサエ後ヘラナデ調整を施す。色調は、明赤褐色を呈する。河内V-1様式の所産と思われる。8は壺の底部、9の底部中央には孔が穿たれている。

・第7区

10~11は広口壺の体部片と見られるもので、外面に櫛描簾状文が施される。12は上方へ肥厚、下方へ垂下する口縁部を有する壺で、口縁端部外面には櫛描による斜線文と刺突列点文を施す。13は壺の底部で、外面縱方向に丁寧なヘラミガキが施され、その後下端部には、横方向のハケナデ調整を施す。15は小型の壺で、緩やかに外反する口縁を有し、体部内面に黒斑が認められる。16は口縁端部が下方に垂下する鉢で、外面は櫛描簾状文の装飾に加え、刺突列点文が施される。内面は、横方向にヘラミガキ調整される。以上は河内IV様式の所産であろう。

[石器]

・第4区

17は緑泥片岩製の石包丁で、現状2つの紐孔が認められる。紐孔は両面から穿孔されている。18~20はサヌカイト製の剥片で、表面に自然面が残る。

・第5区

21~23はすべてサヌカイト製の楔形石器で、横長剥片を素材とする。21は表裏両面上下端部に抉み打ちによる対向する微細な剥離が認められる。22は上下・左右方向で使用したものと思われる。上端部は左右方向での使用時に自然面を残す側からの作用により縦折れしている。そして、表面右側縁と裏面左側縁に微細な剥離痕が認められ、反対側は上下方向での使用時に下端部からの作用により縦折れしている。23は表裏両面の末端部に微細な剥離痕が認められ、一部末端縁部に潰れも見られる。裏面上端部は楔使用時に大きく剥離し、また左側は上端方向から縦折れしている。

### 3.まとめ

本調査区の近隣では、現在までに八尾市教育委員会によって4件の調査が実施されている。1件目は昭和51~53年に本調査地の西側(第1図-2)、2件目は昭和59年に本調査第1区の東隣(第1図-4)、3件目は昭和63年に本調査第4区および第5区の東隣(第1図-9)、4件目は平成8年に本調査第5区の北東部(第1図-17)である。これらの調査成果をみると、すべて弥生時代中期~後期にかけての遺構や遺物が検出されており、時期共に堆積層位(標高)も含め、今回の

調査結果と符合するものである。今回の調査では該期の相当層として第5層が挙げられる。本層には中期～後期にかけての遺物が検出されることから、該期において当地が集落を形成する上で安定した土地条件であったことを明示しているものと言える。本遺跡では今まで40件近くに亘る調査成果から、今回の調査地から北東約150m地点に位置する「天王の森」を中心として弥生時代中期に大規模な集落が形成されていたことが考えられている。今回の調査では遺構そのものは検出できなかったが、遺物の出土状況から該期の集落域がさらに当地まで広がっていること、さらには次の後期においても集落域として踏襲されていることが推察される。

#### 参考文献

- ・寺沢 薫・森井貞雄 1989 「I 河内地域」「弥生土器の様式と編年 近畿編 I」(株)木耳社
- ・趙 哲済・松本百合子・清水和明・絹川一徳・小田木富美恵・細川富貴子 1995 「IV章 第2節 石器遺物の観察」「大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告書」1988年度大阪市長吉瓜破地区 土地区画整理事業施工に伴う発掘調査報告書」(財)大阪市文化財協会



写真1 調査地北部測量風景(南から)



第1区 T.P.+11.0m前後(北から)



第2区 T.P.+11.2m前後(北から)



第3区 T.P.+11.0m前後(東から)



第4区 T.P.+11.3m前後(東から)



第6区 T.P.+10.9m前後(西から)



第7区 T.P.+9.5m前後(東から)



第8区 T.P.+11.0m前後  
水道管理設時の擾乱(東から)



第11区 T.P.+10.5m前後(東から)



第13区 T.P.+11.0m前後(東から)



第1区 重機掘削状況(南西から)



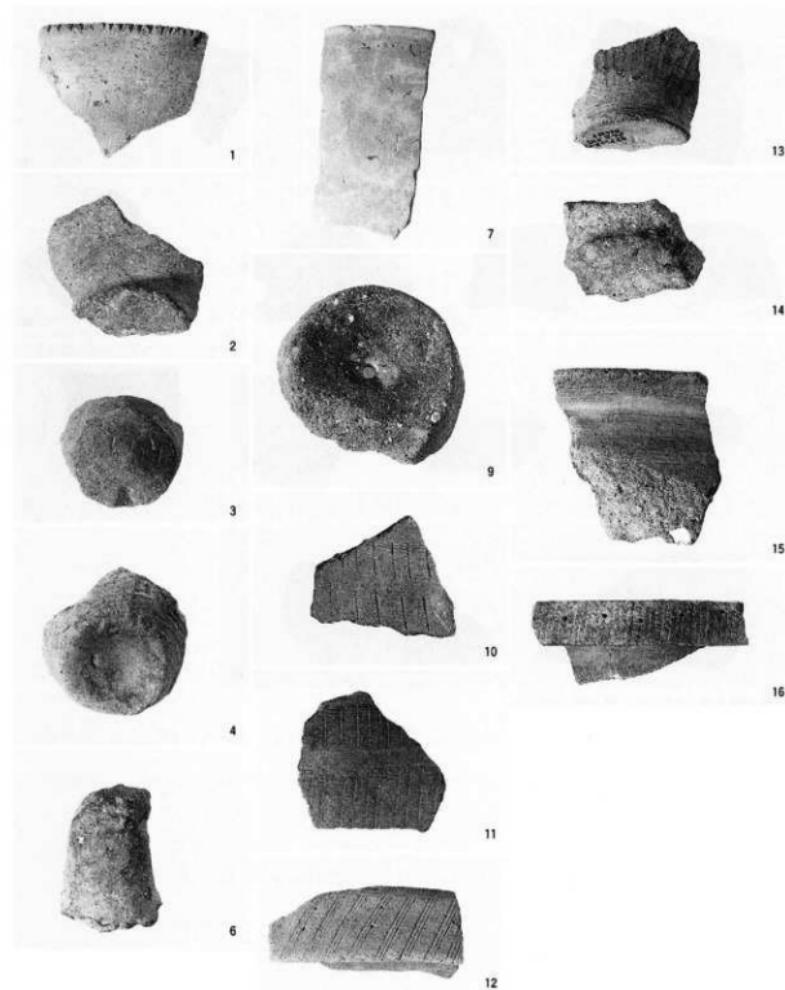
第4区 人力掘削状況(南東から)



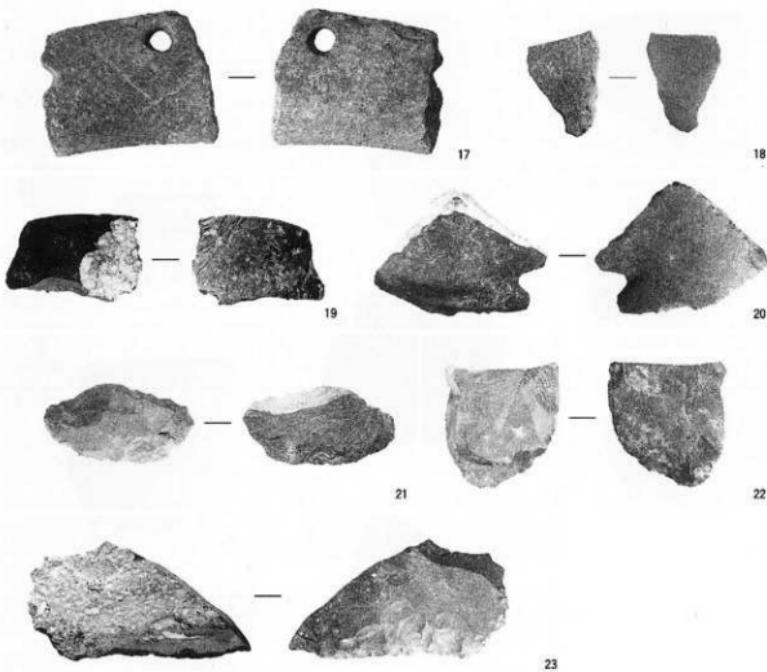
残土置き場における遺物採集状況(南から)

I 恩智遺跡第8次調査(OJ 2000-8)  
II 恩智遺跡第9次調査(OJ 2001-9)

図版  
三



土器／第2区-1、第5区-2~4・6、第6区-7・9、第7区10~16



石器／第4区—17~20、第5区—21~23

### III 亀井遺跡第11次調査（KM2001-11）

## 例 言

1. 本書は大阪府八尾市亀井町4丁目地内で実施した公共下水道工事（12-18工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する亀井遺跡第11次調査（KM2001-11）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教生文第219号 平成12年8月3日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成13年4月26日～4月28日（実働2日間）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約21m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査に参加した補助員は荒川和哉・鈴木裕治である。
1. 内業整理は現地調査終了後随時行い、平成13年9月に終了した。内業整理には上記のほか、田島和恵が参加した。
1. 本書の執筆・編集は、成海が行った。

## 本 文 目 次

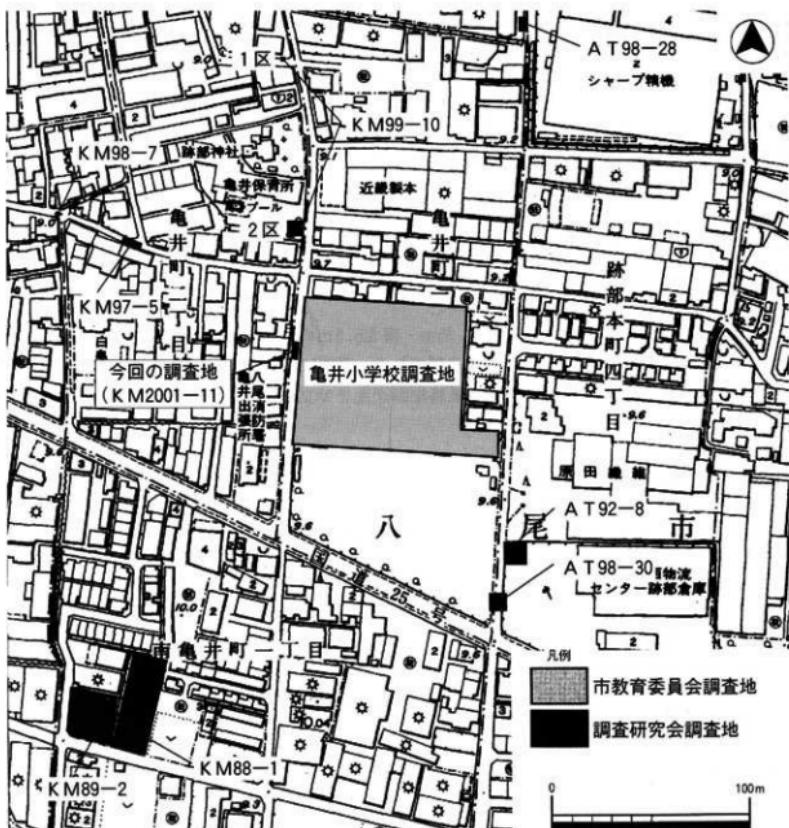
1.はじめに.....	13
2.調査概要.....	14
1) 調査の方法と経過.....	14
2) 検出遺構と出土遺物.....	14
3.まとめ.....	16

### III 亀井遺跡第11次調査(KM2001-11)

#### 1. はじめに

亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町1～4丁目、南亀井町1～5丁目一帯に所在し、旧大和川の支流である長瀬川の右岸の沖積地に位置する。周辺には東に跡部遺跡・西に竹瀬遺跡・北に久宝寺遺跡・大阪市加美遺跡があり、南側には大阪市長原遺跡・城山遺跡などがある。

当遺跡は、昭和43(1968)年、大阪中央環状線建設に先立つ平野川改修工事の際、多量の弥生土器が出土したことによって発見された遺跡である。その後、数回の遺跡範囲確認調査が行われ、昭和44(1969)年には、近畿自動車道建設予定地内で(財)大阪文化財センターによる試掘調査が行



第1図 調査地周辺図(S=1/2500)

われた。昭和53年以降は大規模な開発が継続され、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによって、長吉ポンプ場建設に伴う発掘調査・近畿自動車道建設にともなう発掘調査・平野川改修工事に伴う発掘調査が行われている。一方、八尾市教育委員会では、昭和53(1978)年に市立亀井小学校建設に伴う発掘調査を実施したのを皮切りに、以後、当調査研究会とともに、多くの調査を行っている。これらの調査の結果から、当遺跡は東西・南北500m以上の範囲をもつ弥生時代前期以降の複合遺跡であることが明らかにされている。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事(平成12年度-第18工区)に伴うもので、当研究会が亀井遺跡内で行った11度目の調査にあたり、略号は「KM2001-11」と表す。調査地は遺跡範囲の東部に位置していることから、約100m東へ行くと跡部遺跡「A T」、約220m北へ行くと久宝寺遺跡「K H」と呼ばれる。調査地の近辺では、南東に前述の市立亀井小学校西門が隣接しており、北60~150mに第10次調査(KM99-10)、北西100~140mに第5次調査(KM95-5)・第7次調査(KM98-7)、南西200mに第1次調査(KM88-1)・第2次調査(KM89-2)の各地点が位置している。跡部遺跡の範囲である東側では、北東200mに第28次調査(A T98-28)、南東150~170mには第8次調査(A T92-8)・第30次調査(A T98-30)地点がある(第1図 表1参照)。

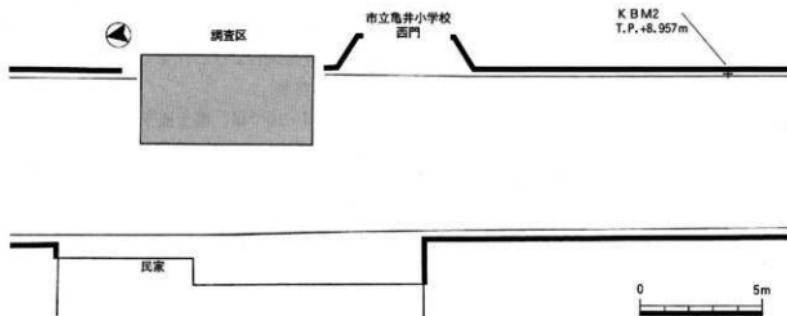
今回の調査については、下水道部から文化財課へ連絡が入った時点では、すでに工事による掘削が進められていた。そのため、急遽工事を中断し、事後の処置を講ずるため下水道部・文化財課・当調査研究会の三者で協議を行った。その結果、掘削の及んでいない現地表下約3.2m以下を調査対象とすることになったものである。

発掘調査の対象となったのは、東西3.25m・南北6.5mの立坑1箇所で、調査面積は約21m<sup>2</sup>、調査期間は平成13年4月26日・28日の2日間である。調査に際しては、機械掘削・人力掘削を併用し、地表下約4.7mまでの工事による最終掘削深度まで立ち会い、遺構・遺物の検出に努め、地層の観察などを行った。

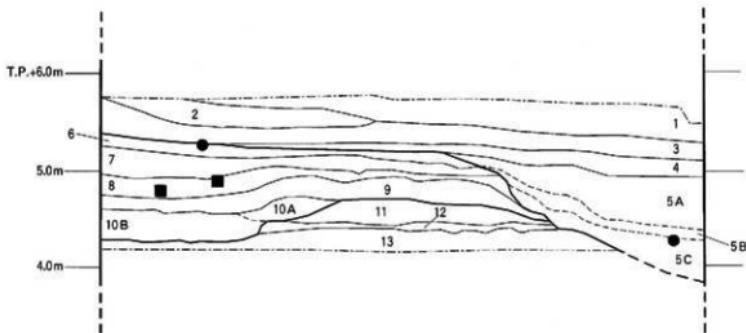
### 2) 検出遺構と出土遺物

現地表面の標高はT.P.+8.95m前後を測る。前述のように、現地表下約3.2mまでの掘削を終えた状態から調査を行ったため、地層断面図はT.P.+5.5~5.8m以下からのものとなっている。地層観察用のセクションを調査区東側に残して調査を進めた結果、第3図に示すように、第1層~第13層までの13枚の地層が確認できた。

このうち、第1層~第7層は概ね南下がり、第8層~第10層は北下がりに堆積している。以下の第11層~第13層は、ほぼ水平に堆積している。南部の第5層はT.P.+5.3mの第6層上面を切り込み、南東方向へ急角度で落ち込んでいる。北東から南西方向の流路を持ち、調査区内での最深は1.1mを測る。植物遺体を多量に含み、湧水量は極めて多い。北部の第10層はT.P.+4.5mの第11層上面を切り込み、北へ落ち込んでいる。流路方向は東から西、深さは0.4mを測る。調査区全体が河川~沼沢地状の堆積状況を示しており、第5層・第10層はその中の流路の一つと考えられる。



第2図 調査区設定図(S = 1/200)



- |             |  |              |                    |
|-------------|--|--------------|--------------------|
| 1 10GY3/1   | 暗緑灰色細砂（少量）混粘土質シルト                      | 8 5GY3/1     | 暗オリーブ灰色細砂混粘土質シルト   |
| 2 10GY3/1   | 暗緑灰色細砂～中礫混粘土質シルトに<br>混入                | 9 5GY5/2     | 灰オリーブ色粗砂に<br>混入    |
| 3 10GY2/1   | 緑黒色粘土質シルト混入                            | 5GY5/1       | オリーブ灰色粘土質シルト       |
| 4 5GY3/1    | 暗緑灰色細砂（極少量）混粘土質シルト                     | 10GY3/1      | 暗緑灰色粘土質シルトブロック状に混入 |
| 5A 2.5GY6/1 | オリーブ灰色微砂～中礫に<br>混入                     | 10A 2.5GY4/1 | 暗オリーブ灰色微砂～粗砂       |
| 7.5GY3/1    | 暗緑灰色粘土質シルト・<br>5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルトの互層  | 10B 2.5GY7/1 | 明オリーブ灰色粗砂～繊        |
| 5B 10GY3/1  | 暗緑灰色シルト粘土に微砂・植物遺体の互層                   | 11 2.5GY6/1  | オリーブ灰色微砂に<br>混入    |
| 5C 2.5GY6/1 | オリーブ灰色微砂～繊に5GY5/2 オリーブ灰色<br>粘土質シルトブロック | 5GY5/1       | オリーブ灰色粘土質シルト       |
| 6 7.5GY3/1  | 暗緑灰色細砂（細多量混）粘土質シルト                     | 10GY4/1      | 暗緑灰色粘土質シルトのブロック    |
| 7 5GY5/1    | オリーブ灰色粗砂に<br>7.5GY3/1 暗緑灰色粘土質シルト（少量）混入 | 12 10GY4/1   | 暗緑灰色粘土質シルト（少量）混微砂  |
|             |  | 13 N2/0      | 黒色微砂（少量）混粘土質シルト    |
- 弥生時代前期の土器片  
■ 弥生時代中期の土器片

第3図 東側壁面図(S = 1/50)

### 3.まとめ

亀井遺跡周辺では、近世以前までに氾濫・埋没を数回繰り返している埋没河川「古平野川」の存在が確認されている。「古平野川」は川幅約200m・深さ約2mの規模を持ち、弥生土器を含む大河川であることが判明している(高島他1983)。今回の調査結果およびこれまでの調査結果から把握できた「古平野川」の流路を以下にまとめてみる(表1参照)。

当調査地の北に位置するKM97-5・KM98-7・KM99-10では、盛土直下の浅い部分で河川内堆積土が検出された。内部には、平安時代前期・室町時代の土器があり、これらの近辺には、平安・室町時代までの河川が機能していたものと考えられる。今回の調査では、上層の状況は確認できなかったが、当調査地の東に隣接する市教委調査地・南東のAT92-8では、この時期に対応する埋没河川は検出されていないことや、工事関係者の「これまで近所であったような水を含む粗砂はなかった」との話からも、中世までの流路は当地点より北側にあったものと考えられる。

表1 周辺の発掘調査一覧表

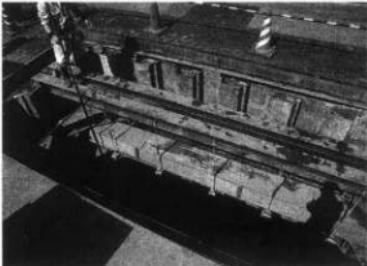
遺跡名・略号		おもな調査成果	文献
亀井通跡	市教委	占墳末期～奈良時代の各土層 占墳時代中期の水溜状地層 杭列を伴う小溝遺構(木片・土師器片・銅鏡) 最下層は細砂含水層	山本昭他 1981「I. 亀井遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告7 八尾市教育委員会
	KM88-1	T.P.+6.3～7.2m 埋没河川 T.P.+6.2m前後 弥生時代後期の遺構面 T.P.+5.0m前後 弥生時代中期の土器棺墓地	近江俊秀他 1989『亀井遺跡－南亀井町4丁目41-1の測定－』(財)八尾市文化財調査研究会報告19 (財)八尾市文化財調査研究会
	KM89-2	T.P.+6.3～7.2m 埋没河川 (古墳時代中期以降の遺物) T.P.+5.0～6.1m 弥生時代中～後期遺構面	成海佳子 1990『10. 亀井遺跡(KM89-2)』『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会
	KM97-5	T.P.+6.2～7.7m 埋没河川 (古墳時代後期以降の遺物) T.P.+5.8m 弥生時代後期初頭の遺構 T.P.+5.0～5.2m 弥生時代中期の遺物包含層	古川晴久 2000『II 亀井遺跡第5次調査(KM97-5)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告66』(財)八尾市文化財調査研究会
	KM98-7	T.P.+6.2～7.5m 埋没河川 T.P.+5.0m 弥生土器片	成海佳子 2000『III 亀井遺跡第7次調査(KM98-7)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
	KM99-10	T.P.+7.8m以下 1区：埋没河川 (宝町時代の遺物) T.P.+7.6m以下 2区：埋没河川	高萩千秋 2001『IV 亀井遺跡第10次調査(KM2000-10)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
跡部遺跡	AT92-8	T.P.+8.3m 錦倉時代の遺構面 T.P.+7.8m 余良時代の遺構面 T.P.+7.3m以下 庄内式期の埋没河川	岡田清一 1993『II 跡部遺跡第8次調査(AT92-8)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文化財調査研究会
	AT98-28	T.P.+7.7m 埋没河川 (平安時代前期の土器片)	森本めぐみ 2000『I 跡部遺跡第28次調査(AT2000-28)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
	AT98-30	T.P.+7.7m以下 埋没河川	森本めぐみ 2000『III 跡部遺跡第30次調査(AT2000-30)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会

下層については、T.P. +5.4m以下で南東方向に落ち込む河川内堆積土(第5層)を検出した。前述の市教委調査地南部では最下で含水量の多い細砂層に達していること、A T92-8ではT.P. +7.3m以下で古墳時代前期(庄内式期)の河川内堆積土を確認していること、A T98-30ではT.P. +7.7m以下で3m以上続く河川内堆積土を確認していることから、古墳時代前期(庄内式期)には、当地点より南東側に流路の中心のあったものと考えられる。

弥生時代については、先の河川(第5層)や第6層・第8層中から弥生時代前期・中期の土器片が少量出土しただけであるが、KM88-1・KM89-2では弥生時代中期・後期の遺構面があることから、集落の中心は当地より南西側にあったものと考えられる。

## 参考文献

- ・石神 怡 1971『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- ・田代克巳・中井貞夫 1972『亀井遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会
- ・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編 1982『亀井遺跡』(財)大阪文化財センター
- ・宮崎泰史編 1984『亀井遺跡II』(財)大阪文化財センター
- ・森井貞雄 1989『1988年度亀井遺跡発掘調査概要—八尾市南亀井町・跡部南の町所在』大阪府教育委員会
- ・辻内義浩・国乗和雄 1978『寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事に伴う亀井遺跡発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター
- ・寺川史郎・尾谷雅彦編 1980『亀井・城山』(財)大阪文化財センター
- ・森井貞雄 1994『1992・1993年度亀井遺跡発掘調査概要—八尾市亀井町所在』大阪府教育委員会
- ・中西靖人・辻内義浩 1974『近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書(現地調査総括編)』(財)大阪文化財センター
- ・高島 徹・広瀬雅信・畠 輝子編 1983『亀井』(財)大阪文化財センター
- ・広瀬和雄・石神幸子編 1986『亀井(その2)』(財)大阪文化財センター
- ・藤永正明・阿部幸一編 1987『亀井(その3)』(財)大阪文化財センター



調査前の状況(北東から)



掘削風景(南から)



東側壁面(T.P. +4.8~5.8m前後)



同左(南部)



東側壁面(T.P. +4.2~4.8m前後)



同左(南部)



調査風景(南西から)



最終掘削状況(南から)

#### IV 心合寺山古墳第5次調査（S O2000-5）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大竹5丁目地内に所在する新池堤体改修工事に伴う発掘調査報告であり、財団法人八尾市文化財調査研究会が史跡 心合寺山（しおんじやま）古墳で行う第5次調査（S O2000-5）にあたる。
1. 本報告における史跡 心合寺山古墳の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第302号 平成12年9月29日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年12月11日から12月28日（実働13日間）にかけて、酒 斎を担当者として実施した。調査面積は93m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査および遺物整理には飯塚直子、市森千恵子、岩本順子、國津れい子、多田一美、長池豊子、横山妙子が参加した。また、遺物整理において当調査研究会の技師（嘱託）金親満夫の助力を得た。
1. 「4.まとめ」は、新池堤体及び樋管改修に伴う各調査担当者〔第1次－原田昌則（八尾市文化財調査研究会）、第2～4次－成海佳子（八尾市文化財調査研究会）、試掘及び調査後の立会調査－吉田野乃（八尾市教育委員会）〕から教示を受け、酒が記述した。その責は筆者にあり、内容の不備等の批判については、その責を負うものである。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	19
1) 地理・歴史的環境と周辺遺跡との関係.....	20
2. 調査概要.....	20
1) 調査の経過と方法.....	20
2) 基本層序.....	21
3) 検出遺構と出土遺物.....	22
4) 遺構に伴わない遺物.....	28
5) 今年度の調査の結果.....	29
3. 第1次調査（S O89-1）の出土遺物について.....	30
4. まとめ.....	31

## IV 心合寺山古墳第5次調査(SO2000-5)

### 1. はじめに

史跡心合寺山古墳は、八尾市大竹4・5丁目に所在する前方後円墳である。昭和41年に墳丘本体部ならびに周濠を形成するとみられる周囲の池と堤体を含む部分が国史跡に指定されている。

古墳は大和と河内を画する生駒山地西麓の扇状地に立地し、標高約26.0~28.0m付近に築かれている。墳丘長約160mを測り、中・北河内最大の前方後円墳である。周辺には時期を前後する前方後円墳や円墳が存在し、地域首長墓の系列に連なるものと考えられている。

周濠の名残とみられる池は堤体などで3つに区切られており、東側の大竹総池、西側の新池、観音寺池に分かれる。このうちの新池の堤体改修工事が平成9年度から開始され、平行して工事施工箇所の調査を行ってきた。今年度はその最終年度となる。



第1図 調査地周辺図

## 1) 地理・歴史的環境と周辺遺跡との関係

心合寺山古墳は大阪府と奈良県の境界をなす生駒山地西麓に立地する中・北河内最大の前方後円墳で、扇状地の起伏を利用して南北を主軸として築かれている。古墳の東側には大竹総池、西側北部には新池、南部には観音寺池が堤で区切られた状態で周囲を巡っており、周濠の名残りをとどめている。近年、史跡整備に伴う調査が行われた結果、葺石や埴輪列が部分的に検出され、墳丘長約160mの三段築成による古墳であることが明らかとなり、後円部の埋葬主体の一部から鏡や劍などが見つかっている。築造時期は埴輪などから5世紀前半と考えられている。

また、墳丘や周辺からは奈良時代の瓦や土器が出土するため当該期の寺院があったことが推定される。しかし、遺構はこれまで見つかっておらず、建立されていた位置や規模については不明である。太秦広隆寺の『寺外末寺并別院記』には「河内秦寺又秦興寺或薬師寺云流記等不明云々」とあり、心合寺はこの秦興寺(しんこうじ、あるいはしんごうじ)ではないかと推定されている。

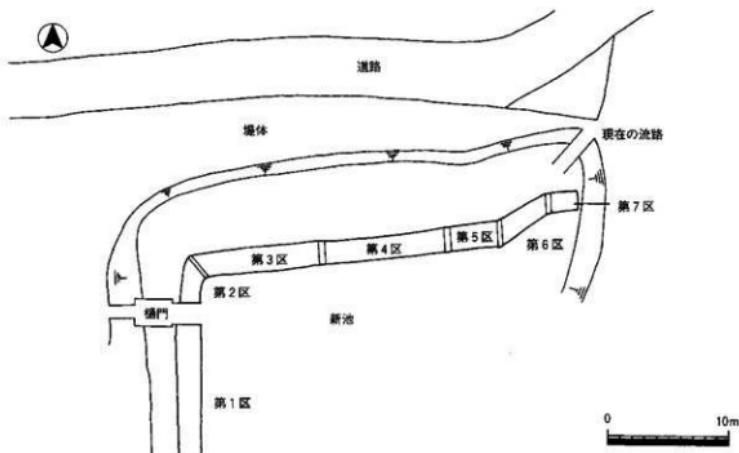
周辺には西の山古墳、花岡山古墳、向山古墳などの前方後円墳や中谷山古墳、鏡塚古墳などの円墳が存在し、4世紀～6世紀にかけて連繩と地域の首長級墓が当地に築造されている。このような地域首長を経済的に支えたのは扇状地の眼下にひろがる河内平野であった。旧大和川がもたらす豊富な水と肥沃した土壌は穀物の栽培に適しており、弥生時代から耕作地が広がっていたようである。とくに旧大和川の支流である古玉櫛川沿いに所在する池島・福万寺遺跡や志紀遺跡では弥生時代前期に遡る水田遺構が確認されている。こうした農業生産力を背景に集落が形成され、瓜生堂遺跡や龜井遺跡、思智遺跡等、大集落に発展したところもある。古墳時代になると中田遺跡、小阪合遺跡、東郷遺跡など旧大和川がつくりだした自然堤防上に集落が展開するようになり、大和へ向かう西からの玄関口として各地との交流が活発になっていく。吉備・讃岐・阿波などの瀬戸内系の土器や山陰系の土器の出土はそうした状況を反映しているものといえよう。また、池島・福万寺遺跡は古墳時代中期後半から後期にかけては滑石製品、移動式竈、装飾品、須恵器器台などが出土することから葬送儀礼専業集落としての可能性が指摘されている。このような社会状況を背景に心合寺山古墳周辺に地域首長墓が築かれていたのである。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の経過と方法

心合寺山古墳の周濠の名残りと推定される池は現在、堤や里道により東側は大竹総池、西側北部は新池、南部は観音寺池の三つに分割されている。扇状地の緩斜面を利用して築造されているため東側と西側の池では高低差があり、樋管を通して高位にある東側の大竹総池から低位にある西側の新池に水が排出されている。

今回の調査は平成9年度から継続して行われている新池の堤体改修工事に伴う発掘調査（当調査研究会の第2～4次調査）の最終年度にあたり、当調査研究会が遺跡内で行う第5次調査に当たる。工事は堤体の池側にコンクリートの護岸を築くもので、池部分を掘削し、基礎工事を行った後に傾斜した護岸面に堤体を構築する工法を探っている。このため調査は基礎工事による掘削部分が対象となった。今年度は平成元年に付け替えられた西北側の樋管（S O 89-1の調査対象部分）周辺から北側にかけての堤体部の工事であったため、幅2mでL字形のトレチを設定した。トレチは南北方向に14.5m、東西方向に32mで、調査面積は約93m<sup>2</sup>であった。



第2図 調査区設定図(1/400)

調査方法は上面のヘドロを重機によって除去した後、人力を用いて掘削を行った。区画割りは工事にあわせてトレーナーを西から第1～7区に分けた。調査は実働13日を要し、平成12年12月11日に着手し、12月28日に終了した。出土遺物は弥生時代後期の土器や石器、古墳時代の埴輪、奈良～中世の瓦や土師器、瓦器、白磁などで、総量はコンテナに2箱である。

## 2) 基本層序

調査地は池の内部で、層序は堤体から池に向かって傾斜する堆積状況（図版二下段左）を示しており、池側では滞水による砂やシルトの堆積が顕著である。そのため主に堤側の土層を用いて基本層序を設定したが、部分的に池側の土層も用いた。なお、第3図の南壁断面図（池側）は北壁断面（堤側）との対比のためにおおまかに基本層序のみを示している。

0層 現代の盛土層で西側の第1区のみで確認される。堤改修に伴って運び込まれたものである。

I層 10Y4/1灰色微砂～微砂シルト混じり（層厚0.3～0.7m）現代の池の滞水による堆積層で、釣り糸やビニールなどのゴミが混じる。大竹総池から運ばれた土砂や堤体の浸食により削られた土が沈殿したものである。耕作時の放水や乾期の干上がり時の土壤化が確認される。

II層 5Y7/1灰白色細砂～微砂（層厚0.3m）ラミナがみられ、釣り糸等のゴミは混じらないことから、近代～近世の池の滞水による堆積層と思われる。堤体よりも池側の土層で顕著である。堤体側でも確認されるが、I層との分離が明確ではない。

III層 7.5Y3/2オリーブ黒色砂質土（層厚0.15m）雲母片を多量に含み、暗オリーブ灰色粘質シルトが混じる。現状の堤を構成する土層で第1～4区においてみられる。遺物は出土

していないが、既往の調査から近世以降と思われる。

- IV層 2.5GY5/1オリーブ灰色微砂シルト（層厚0.2~0.3m）10GY5/1緑灰色シルト粘土をプロックで含み、5mm前後の礫が少量混じる。現状の堤よりも古い堤体の土層で、第3~4区では池の底面を成し、グライ化している。近世に築かれた堤体面である。
- V層 10Y5/1灰色シルト微砂混じり（層厚0.3m）第7区でみられる近世に整地された可能性のある土層で、陶磁器とともに瓦器、土師器、埴輪が出土する。
- VI層 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト細砂混じり（層厚0.3m）上面は中世~近世の遺構面となる。シルト質が強く、やや脆弱な地層である。西壁では北側で薄くなるとともに池側では人為的なものかどうかは不明だが落ち込んでいく様子がうかがえる。層中には中世後半の遺物が少量みられる。
- VII層 2.5Y3/1黒褐色シルト粘土（層厚0.1m）瓦片や瓦質土器などを少量含むことから中世後半の土層と考えられる。
- VIII層 7.5Y5/1灰色シルト微砂混じり（層厚0.3m以上）鉄分を含む。第7区でみられ、上面に石積み遺構が構築されている。瓦器や瓦片を包蔵しており、中世の包含層となる。池の岸辺にあり、人為的な土層とみられる。
- IX層 7.5YR4/4褐色砂質土礫混じり（層厚0.4m以上）3~5cmの礫を含む。西側では2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土礫混じり（砂分が強い）となる。古墳築造以前の地山層と考えられ、上面でサヌカイト片が出土したことや周囲の調査状況から弥生時代後期以前に形成された土層であろう。また、第6区では7.5GY4/1暗緑灰色微砂シルト、5Y5/2灰色オリーブシルトが堆積しており、地山とみられる。
- X層 10Y3/1オリーブ黒色細砂シルト混じり~2.5GY3/1暗オリーブ灰色微砂（層厚0.6m以上）地山の谷地形に沿って堆積した土層で、微砂~細砂に3~5cm大の礫を多く含むことから、急激な流れによってもたらされたものと思われる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

近世~現代の池底面と近世の堤、近世から中世にかけての石積み遺構や流路に伴う礫敷遺構、中世の土坑を検出し、古墳築造以前の地山を確認した。以下、項目ごとに概説する。

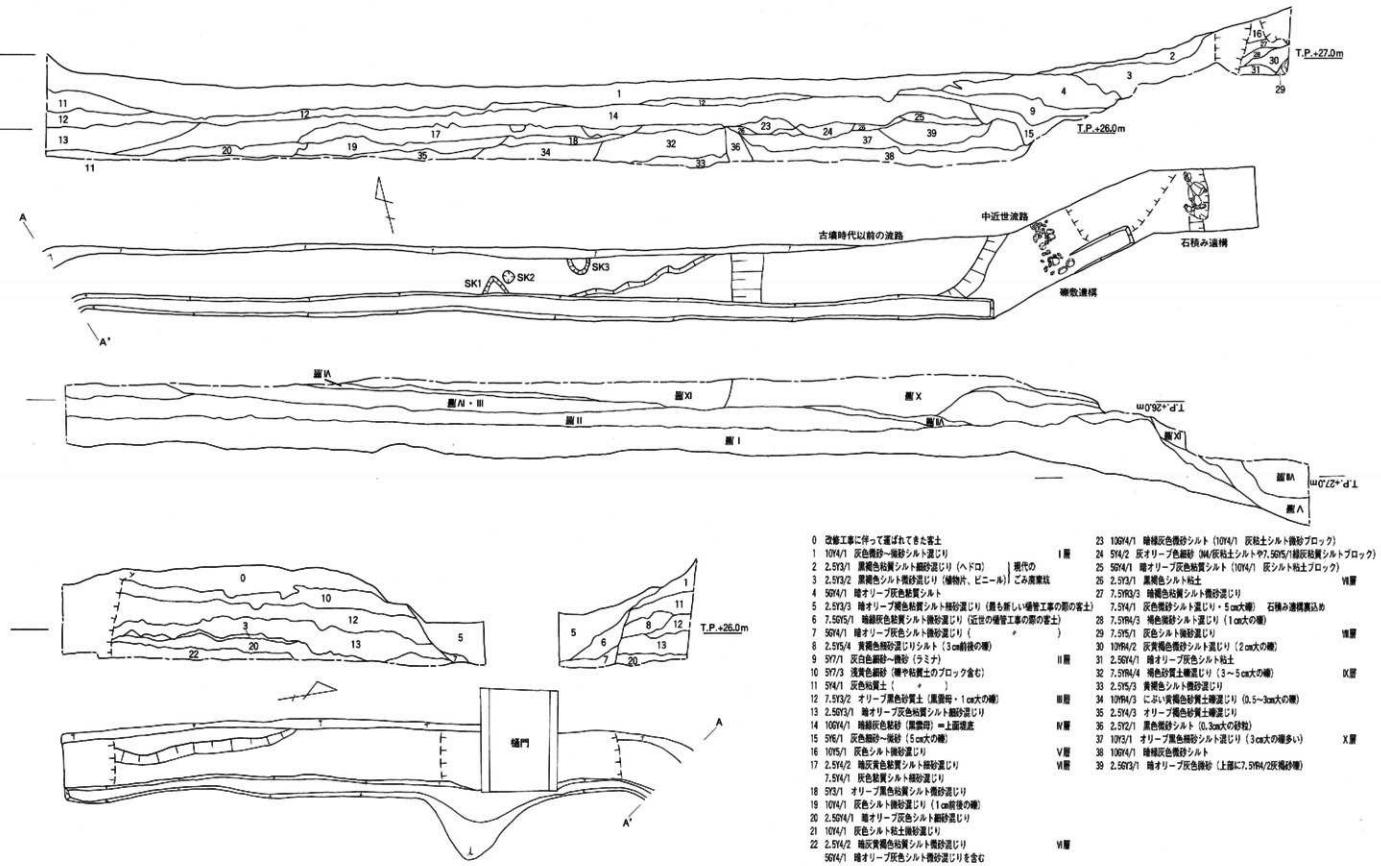
#### ○近世~現代の池底面と近世の堤

いずれもレベル的に高位にある第7区を除く全調査区で確認されるが、近世の堤痕跡に関しては第1~2区にある橿門周辺は平成元年度の工事（当研究会 第1次調査）の際に削平されていた。また、第6区は近代~現代の流路に伴う土層が堆積していた。

各調査区の堤~池底面の検出レベルは下記の表にまとめた。

表1 堤と池底面のレベル

	第1区	第2区	第3区	第4区	第5区
堤側（地表下） (標高)	0.5m T.P.+26.4m	0.45m T.P.+26.55m	0.4m T.P.+26.2m	0.3m T.P.+26.3m	0.25m T.P.+26.45m
池側（地表下） (標高)	0.75m T.P.+25.95m	0.5m T.P.+25.9m	0.62m T.P.+25.85m	0.6m T.P.+26.0m	0.55m T.P.+26.05m
比高差	0.45m	0.6m	0.35m	0.3m	0.4m



第3図 調査区平面1/100及び土壘断面図(垂直1/50、水平1/100)

これをみると堤側ではコーナー部にあたる第2区が高く、最も低い第3区との高低差は約0.45mある。しかし、池側では全体の高低差は約0.2mしかなく、池底面がフラットに近くなっていることがわかる。

グライ化が顕著であったため平面では検出できなかったが、部分的に残したセクションの断面観察の結果、堤構築層と池底面構築土層とは異なっていることが判明した。堤を形成していたのは7.5 Y3/2オリーブ黒色砂質土で、雲母が多く含んでいる。これに対し池底面を形成していたのは2.5GY5/1オリーブ灰色微砂シルトであった。こうしたことから、近世のある段階で堤を北に向かって広げた可能性が想定される。

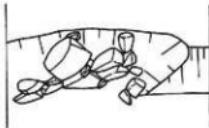
#### ○近世～中世の石積み遺構、樋管に伴う礫敷遺構、土坑

##### 石積み遺構

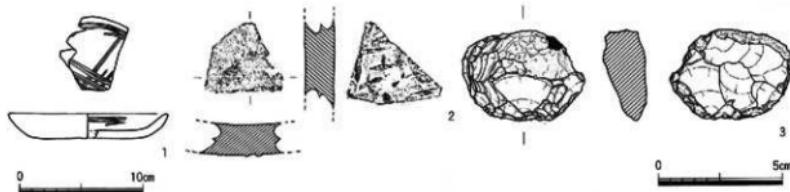
第7区で検出した。これは検出高約0.7mで、南北に通した敷木を基礎として、その上に人頭大の礫を3段前後積んでいたもので、検出部分は遺構の南端部にあたる。遺構に伴う掘り方は南北長1.2m以上、東西長0.55mで、灰色微砂シルト(0.3~1cmの礫を含み、褐色粘土シルトブロックが混じる)を埋土とする。石積みは本来北側にのびるようで、北東角にあった樋管に付帯していたものと推定される。しかし、現状の樋管はコンクリート製となっており、石積み遺構の北側は破壊されていた。石積みの裏込めからは楔形石器(3)もみられたが、主に12世紀後半に属する瓦器焼、瓦器皿(1)や須恵質の平瓦(2)【凸面一十字状タタキ・凹面ナデ】が出土しており、鎌倉時代以降に築造されたものと考えられる。



④灰色微砂シルト(0.3~1cmの礫を含み褐色粘土シルトブロックを含む)



第4図 石積み遺構平・立面図(1/40)

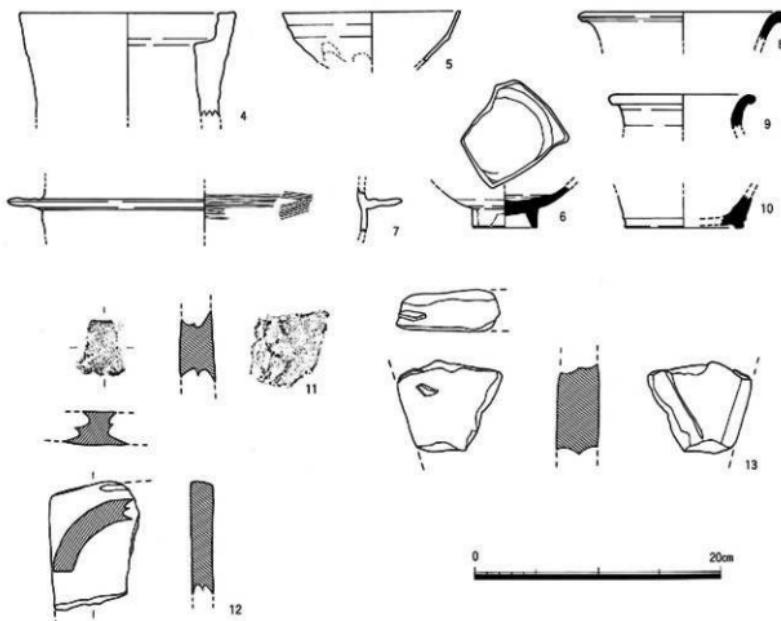


第5図 石積み遺構周辺出土遺物(土器・瓦1/4、石器1/2)

##### 樋管からの流路に伴う礫敷遺構

第6区で検出した。樋管からの延長である流路部底の粘土シルトブロックを含む灰白色細砂上面に拳大よりやや大きな礫を敷きつめていた。これは流路部分の水掘れを防ぐための護岸としての機能を有しているものであり、捨石行為を行っていたものとみられる。しかし、現状では流路部分に近世～現代の土砂が堆積しており、地山を掘り込む搅乱もあることから遺存状態は不良で

調査区の西端から1m程度を検出するに留まった。この近世～現代の堆積層からは第1～3次調査で検出されている樋管用の瓦質(4)及び陶質土管片が出土している。また、捨石の直上まで現代の土層が堆積しており、転落した礫を取り除くと幕末以降の陶磁器等が散見されるが、このような遺物に混じって瓦器榤(5)、白磁榤(6)、瓦器羽釜(7)、須恵器壺(8・9)・杯(10)、平瓦(11)、玉縁式丸瓦(12)、道具瓦(13)等、古代から中世の所産と考えられる遺物が出土する。こうしたことから石積み遺構と同じく鎌倉時代以降に構築されたと推定される。11は土師質で凸面に不整格子のタタキを用いる。12は広端部で、須恵質である。また、13は3～5mm程度の砂粒を多く含み、土師器の碎片が胎土中にみられる。(図版三-13中央)



第6図 磯敷遺構周辺出土遺物(1/4)

#### 土坑(SK)

遺構面と考えられる暗オリーブ灰色シルト粘土は第3～5区にかけて遺存しており、第4区で土坑3基(SK1～3)を検出した。検出面の高さはT.P.+26.5m前後である。

SK1 隅丸方形を呈すると思われるが、調査区外にのびるため全容は不明である。南北長0.34m、東西長0.55m、深さ0.11mを測る。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色シルト微砂混じりで1～2mm大の砂粒や雲母を含む。土師器の極細片が出土した。

SK2 楕円形を呈し、断面形状はレンズ状である。南北長0.32m、東西長0.22m、深さ0.07mを測る。埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色シルト微砂混じりで1～2mmの砂粒を含む。遺物は出

土しなかった。

S K 3 楕円形を呈し、北側が調査区外にひろがる。断面形状は皿状である。南北長0.39m、東西長0.47m、深さ0.1mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土シルトである。遺物は出土していない。

土坑から時期を特定できるような遺物は出土していないが、ベース層よりも下部の堆積層より中世後半の瓦器擂り鉢が出土している。このような遺構の存在から調査区周辺は中世段階には古墳の周濠ではなかった可能性が示唆される。

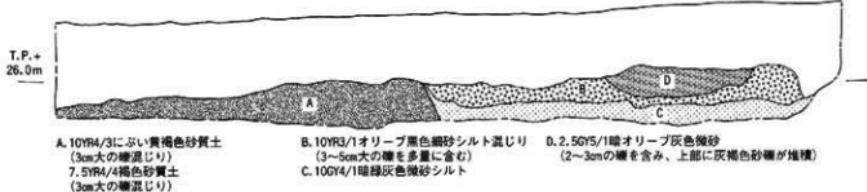


第7図 土坑断面図(1/40)

#### ○古墳築造以前の地山層

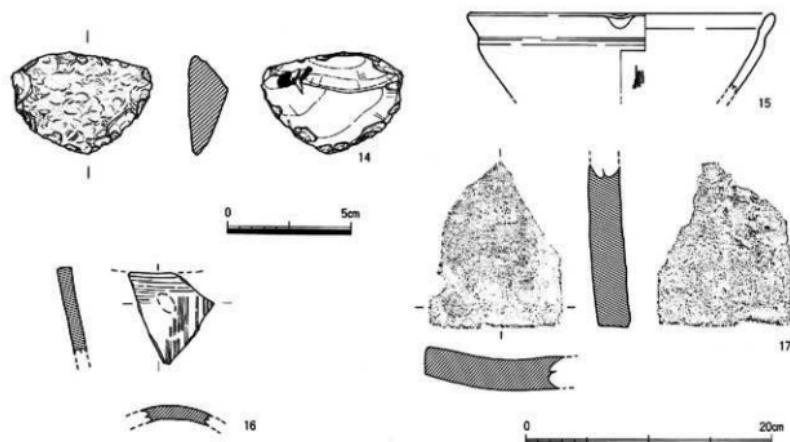
地山層は第3～5区にかけて確認できた。第6区でも土質は異なるが、地山の可能性のある土層が観察される。第3～4区では地表下0.95～0.5m(T.P.+25.7～26.0m)に遺存するA層10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(3cm大の礫混じり)、7.5YR4/4褐色砂質土(3cm大の礫混じり)が相当し、直上面でサヌカイト製の楔形石器(14)が1点出土している。こうしたことから弥生時代後期以前の堆積層と推定される。これを覆う上部層には第3区でのみ瓦器擂鉢(15)や須恵質の行基式丸瓦片(16)、平瓦片(17)などの遺物が出土している。16は広端部で、凸面にナデ調整されているがタタキの痕跡がみられる。凹面もナデ調整である。17は須恵質で、凸面は蜻蛉状の文様のあるタタキ、凹面は布目痕が残る。一枚作りである。また、埴輪は摩滅した細片がわずかに出土ただけである。この上部層が古代～中世後半段階に攪拌、削平を受けているにせよ、極少量の埴輪片しか出土していないということは古墳築造時から古代までの間は周濠の外であつたことが推定され、また外堤上にも埴輪が樹立されていなかった可能性も考えられる。

第4区東側～5区では礫を多量に含む激流による堆積層がある。堆積物は上部がB層10Y3/1オリーブ黒色細砂シルト混じり(3～5cmの礫を多量に含む)、下部がC層10GY4/1暗緑灰色微砂シルトである。これらの堆積物は北東方向から南西方向に流れていたと推定され、谷状地形に沿って堆積したものと考えられる。また、この堆積層を削るD層2.5GY5/1暗オリーブ灰色微



第8図 第4～5区北壁地山層模式図(垂直1/50・水平1/100)

砂（2～3cmの礫を含み、上部に灰褐色砂礫が堆積する）が第5区でみられる。これはB層およびC層による堆積を切り込んでいることから、少なくとも2度にわたる急激な流れがあったことがうかがえる。これらの堆積物内には遺物は包蔵されていなかったが、上述しているように地山層付近から弥生時代後期の遺物が出土していることから同時期以前のものと推定される。



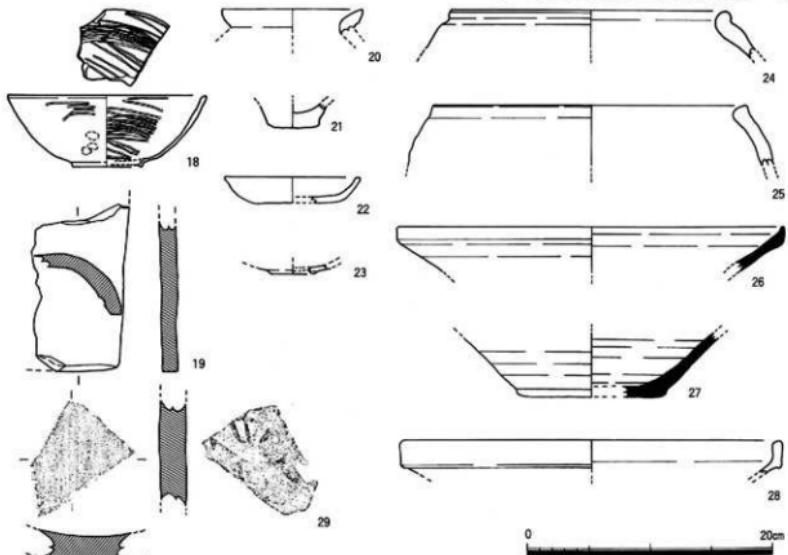
第9図 地山層付近出土遺物(土器・瓦1/4、石器1/2)

#### 4) 遺構に伴わない遺物

瓦器椀（18）と行基式丸瓦（19）は第7区の31層から出土したものである。18は高台が断面三角形を呈し、外面は口縁付近に僅かにヘラミガキを施すもので12世紀中葉に比定される。19は狭端側の部位で、凸面は摩滅が著しいがナデ調整、凹面は布目痕が残る。これらの遺物が含まれる土層は石積み遺構が構築される以前のものとみられる。

弥生土器の甕口縁（20）と底部（21）は第6区の地山層上面付近から出土したものである。摩滅しており、調整などは不明だが、形状から弥生時代後期に位置づけられる。しかし、地山上面まで近世の人为的な手が加わっており、本来、地山に付随するものかどうかは明確ではない。土師器皿（22）は第5区のセクションから出土した。

瓦器椀底部（23）は第2区の堤底面構築層から出土した。高台は粘土紐をナデつけただけのもので14世紀前半に比定される。また、土師器羽釜（24・25）や東播系須恵器鉢（26・27）、炮烙（28）、平瓦（29）は第2～3区で基本層序のII層を形成する近世～近代の砂層から出土した。羽釜は河内産で、森島氏による分類ではA類に属し、13世紀末葉の所産である。東播系須恵器鉢のうち26は口縁端部が摘み上げられており、12世紀後半に比定される。炮烙（28）は直立気味の口縁端部をもつもので18世紀頃のものであろう。平瓦（29）は須恵質で、（17）と同じタタキを凸面に用いており、同様に1枚作りである。このように遺物は中世から近世にかけての遺物が混



第10図 遺構に伴わない遺物(1/4)

在しており、近辺から運ばれた土で築かれた堤体が池水によって浸食され、露出した遺物などが池底に堆積したものとみられる。

### 5) 今年度の調査結果

今回の調査では弥生時代から現代までの土層の堆積状況を確認することができた。また、中世から近世にかけての遺構を検出し、同時に遺物を得た。以下、それをまとめておく。

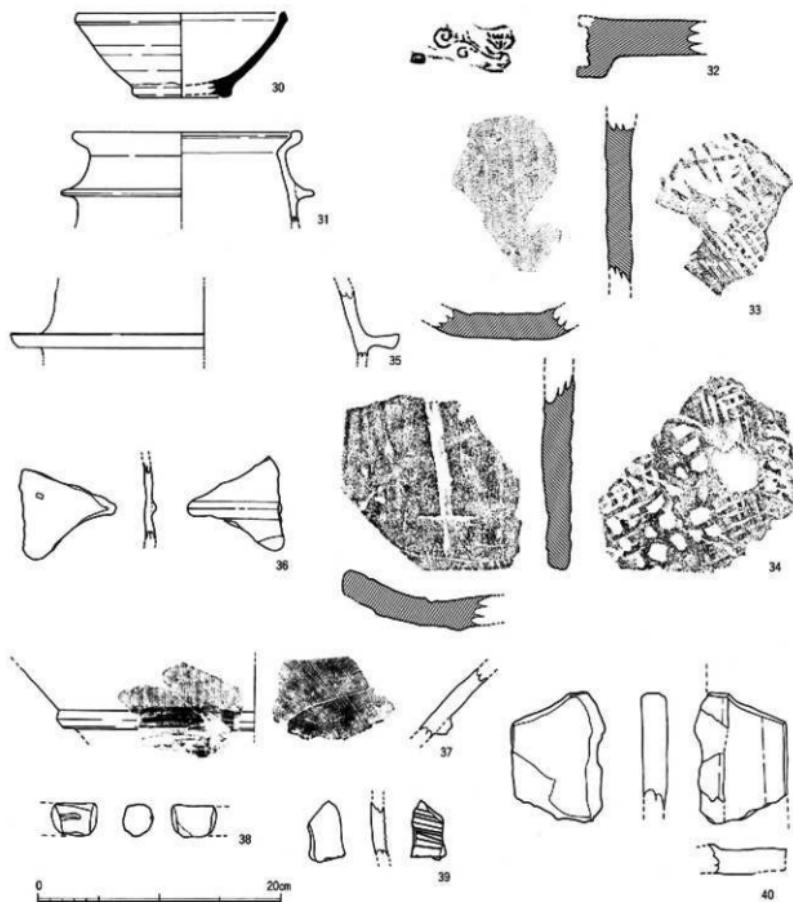
最も大きな成果は古墳築造以前の地山層とその上部の堆積層を確認したことである。上部の堆積層は中世を前後する時期からの土層であり、周濠に伴う水成層の堆積ではなかった。すなわち調査地は心合寺山古墳が築造された段階には周濠の外であったことも考えられる。現在の古墳を巡る池は中世以降、周辺の土地の耕地化あるいはその拡大とともに拡張されてきたものとみられる。今回の調査ではこれを裏付けるように堤を形成する土層が異なっている部分がみられ、堤が北側に広げられていることがわかった。このような堤体を広げる状況は第1・3次調査においても確認されている。こうしたことから、古墳築造時の周濠は調査区よりも内側にあることが示唆され、大竹総池が本来の周濠に近く、盾形周濠と推定される。

また、地山層の検出は今後墳丘構築についての議論のなかで必要な資料が得られたものであり、礫を多量に含む急激な流路の確認は古環境の復元を考えるうえで興味深いものである。

中世段階の遺構については、これまでの古墳の調査から中世以降に墳丘面が改変されていることが指摘されているが、これと一致する結果である。ただし、今回の調査地が居住域の近辺であったかどうかは明確にはできなかった。今後周辺の調査とも併せて判断すべき事項である。

### 3. 第1次調査（S O89-1）の出土遺物について

第1次調査ではコンテナ2箱の遺物が得られたが、概要報告では様々な事情で実測図が掲載されなかった。多くが新池全域で表面採取されたもので、瓦と埴輪の碎片が大半を占める。新池堤体改修工事の調査も終了することから、今回、調査担当者の諒解を得て堤体周辺出土遺物を含め、幾つかを図化した。また、概要報告で図化されていたが、写真のなかった樋管用の瓦質土管については写真のみを掲載した。（図版五下段右）



第11図 第1次調査(S O89-1)出土遺物(1/4)

白磁碗（30）は堤体構成土から瓦片とともに出土したと報告されているものである。口径16.8cm、器高7.1cmで、口縁に玉縁を作り、低い高台をもち、釉は高台に及ばない。胎土に黒色の砂粒を含む。このような特徴から森田氏のⅢ類に相当する。土師器羽釜（31）と瓦（32・33・34）は樋管掘り方から出土した。31は口径18.2cmで、胎土に砂粒を多く含む大和産の羽釜である。12世紀中葉頃に比定される。蓮華唐草文軒平瓦（32）は、法隆寺出土の274型式に類似するが、蓮華文の形態や茎の反転などが異なる。鎌倉時代後期。33は凸面に格子と納鉢状の文様のタタキを組み合わせており、凹面は布目で模骨痕が確認される平瓦であり、桶巻き作りの可能性がある。須恵質。34は凸面に格子と多角形の組み合わせ、凹面には布目痕が残るが端面までは及ばない。1~2mmの砂粒を多量に含む。1枚作りか。

35~40は表面採取されたものである。羽釜（35）は厚手で、砂粒が少ない精良な胎土である。端部を欠くが、直立する口縁に段はみられない。室町時代以降の所産であろう。埴輪（36~40）も多く見つかっているが、特徴的なものだけを掲示する。円筒埴輪（36）は表面が磨滅しており、ハケ痕跡は不明であるが、タガは低く、断面三角形を呈する。朝顔形埴輪（37）は窑窯焼成による須恵質で、タガは台形を呈することから川西編年IV期に位置付けられる。心合寺山古墳ではこれまで確認されていないもので、心合寺山古墳に伴うものかどうかは慎重な判断が必要である。38は端部が広がる円筒形を呈し、家型埴輪の堅魚木あるいは棟の部位と考えられる。39は数本の線刻があり、鳥形埴輪の羽の部位などが想定される。40は斜方向の透かしあるいは切り込みがあり、凸状の貼り付け痕跡が残る。また端部でも粘土の貼り付け痕跡がみられ、埴輪の中心からわずかに湾曲する様子が観察される。形態等については不明である。

#### 4.まとめ

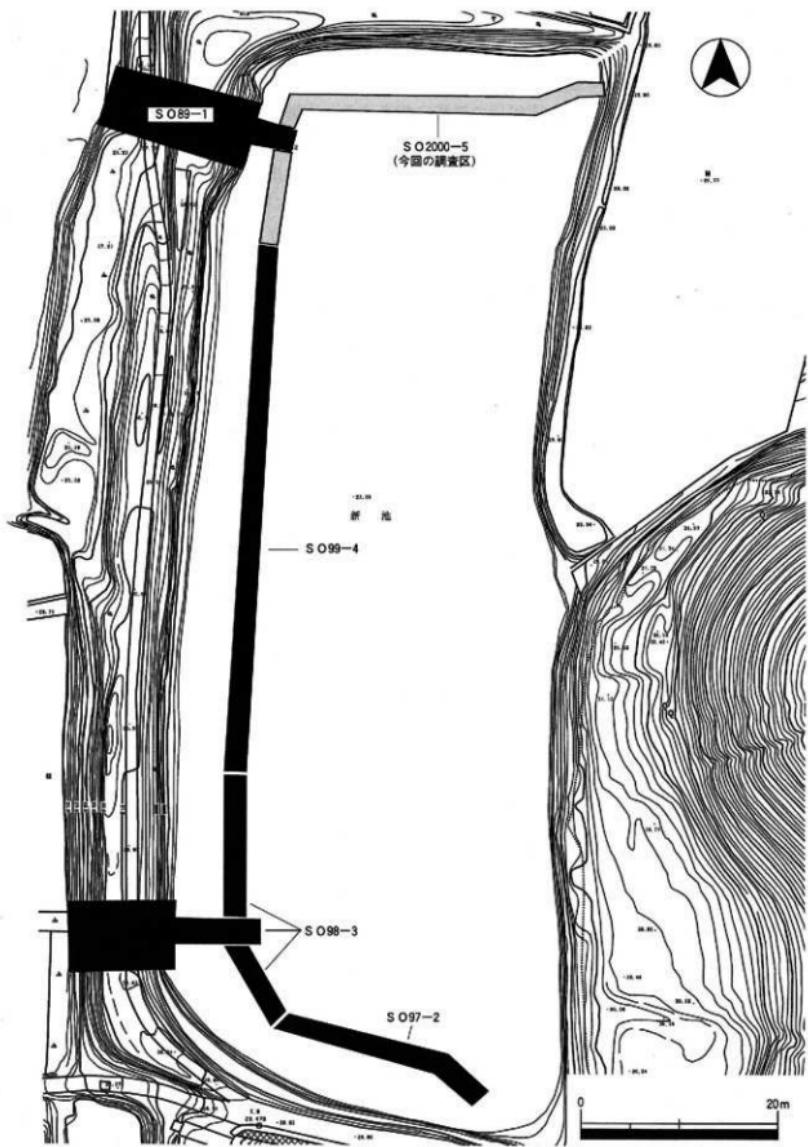
平成9年度から始まった新池の堤体改修工事に伴う調査も今年度で一応の終結となる。そこで、新池北隅の樋管付け替え工事による第1次調査も含めて新池内で行われた調査（第1次~5次調査）をまとめておく。

#### 第1次調査（SO89-1）

北西隅の樋管改修に伴う調査で堤体を東西方向に断割り、その築造状況と樋管の敷設状況を確認した。堤体の築造は3時期に分けられ、その都度盛土を積み重ねるとともに、西側（墳丘外側）と上部に拡張されていることが判明した。樋管は瓦質、陶質の2種が使用されていたが、瓦質から陶質への交換が行われていた。また、瓦質樋管下の礎板に記された墨書から正徳六年（1716）に敷設されたことが分かった。こうしたことから、調査付近の堤体が古墳築造当初のものではなく、後世のものであることが明らかとなった。堤体の最も新しい3期の盛土から瓦類や白磁碗が出土したことから、心合寺が存在した付近の土が積まれたものと担当者は推定している。

#### 平成9年度試掘および立会調査

2・3次調査のため2箇所の試掘孔を池側に設定している。それぞれ当研究会の第3次調査部分（第1区）と第2次調査部分（第2区）に該当する。第1区では堤体にトレーナーを開け、須恵器や土師器、瓦等を含む土層を検出した。堆積層は3単位に分けられ、平安時代以降の堤体部分を確認し、さらに古い堤体の存在を推定した。第2区では標高25.8mまで掘削しており、池内の砂層堆積から瓦や埴輪が出土している。この調査および墳丘本体付近の立会調査から白鳳時代に



第12図 新池発掘調査地位置図 ( $S = 1/500$ )

周濠を埋めた整地面に心合寺は建立され、廃絶後に灌漑用の溜め池として利用されたものと考えた。

#### 第2次調査(SO97-2)

堤体改修工事の初年であり、新池と觀音寺池を画する東西方向の堤体下部（上面は里道となっている）の調査を行った。ここでは2ヶ所の石組み遺構と池底における礫敷きの痕跡が検出された。石組み遺構のうち墳丘側で検出されたものは南東から北西への流路とされ、くびれ部付近からの排水施設に伴うものと推定されている。時期は鎌倉時代以降とされる。この石組み流路の延長は教育委員会が平成11年度に行った調査でも検出され、造り出しの一部を破壊していたことが確認された。本調査における出土遺物は埴輪、瓦、奈良時代の土器などである。

#### 第3次調査(SO98-3)

第2次調査の延長部と南西隅の樋管改修に伴う調査で、樋管部分については第1次調査と同様に堤体を東西方向に断割っている。樋管は上下2基の樋管が検出された。上部は標高28m付近に設置されたヒューム管製の樋管である。下部は標高25m付近にあり、堤体下は板樋（板を組み合わせ箱状にしたもの）を用い、東側（池側）の陶質管と接続している。また、西側排水口はコンクリート製になっており、さらに埋土中から瓦質管が見つかっていることから数回の補修がうかがえる。第1次調査では瓦質管を部分的に陶質管に交換していたが、今回も、同様な交換を行なっている。しかし、第1次調査では瓦質管は取り替えのできない堤下部に使用されていたのに対し、ここでは交換部分が瓦質から陶質であり、堤下は板樋であった。このため、板樋は瓦質管よりも古いことが考えられる。ただ、埋土中には陶磁器が含まれていたことから、瓦質管との時期差は大きくななく、17世紀後半以降と推定される。

また、樋設置のための切り込み面は現状堤上面とさほど変わらないことから、堤は当該時期にはすでに現代にみられるような形態に成っていたことがうかがえ、第1次調査の結果を裏付けることになった。堤築造は少なくとも5時期に分けられ、最も古い堤5は現況より、約4m下にあり、上面堆積土から瓦片が見つかっていることから、平安時代以降の面と推定される。また、中世の間にその面よりも約2.5m盛土されているが、灌漑用水の増大が見込まれることからこの時期に周辺地域の農地化が進んだことを示唆するものである。

#### 平成10年度立会調査

当研究会3次調査終了後の立会調査で、西側の旧堤体層を確認し、腐食土から7世紀後半～鎌倉時代にかけての瓦が出土し、堤体の盛土が心合寺廃絶後の包含層で構築している事を確認した。

#### 第4次調査(SO99-4)

第3次調査の延長部分に南北方向のトレンチを長さ56mを幅2mで設定し、調査を行った。その結果、標高25.7～26.0mで池底となる堆積層が検出された。池底には周辺からの転落したと推定される礫が堆積しているため、岸辺の近くであろうと考えられた。また、この池底形成層の下部には平安時代以降の瓦片を包蔵する土層があることから、中世以降の岸辺と報告されている。出土遺物には奈良時代以降の土師器片や瓦器、近世～近代の陶磁器、瓦質土管とともに極少量の埴輪片がある。

第5次調査については、本文を参照してもらうとして、次にこれまでの調査すべてから判明した点を抽出して箇条書きにしておこう。

- ① 古墳構造以前には墳丘西側に礫を多く含む流路が北東－南西東向にのびているが、これは墳丘のある屋根状の起伏が作りだした谷筋に沿っているものと推定される。また、これまで墳丘部分の調査で弥生時代の遺物が出土し、裾部で包含層が確認されてきたが、周濠部分でも遺物が見つかっていることから、遺構面の広がりが推定される。
- ② 北側の調査区では地山層の上部に水成層が堆積していないことから、古墳築造には周濠の外側に位置していたと推定され、古墳本米の周濠は調査区より内側にあり、盾形周濠のような形状をとる可能性も指摘できる。
- ③ 堤体は古墳築造時以降何度も手が加えられ、外側に広げられると同時に高さも大きくなっている。西側堤体の現状は奈良～平安時代の堤体よりも3～5mに外側あり、しかも4m程度高くなっている。
- ④ 堤体に人為的な手が加わることが確認される時期は奈良～平安時代以降であるが、最も大きく改変されるのは中世以降で、17世紀後半にはほぼ現状の規模になっていたようである。
- ⑤ 墳丘に近い第2次調査以外では埴輪の出土が極僅かなため、堤体上面に埴輪が樹立されていた可能性は低いものと考えられる。
- ⑥ 第2次および第5次調査では石組み遺構、石貼りの流路、池底の礫敷が検出されているが、いずれも11～12世紀以降に構築されたものと考えられ、堤体の改修の時期と大きな隔たりはない。また、墳丘の調査において中世以降の石組みの存在が指摘されていたが、これと一致する。
- ⑦ 第1・3次調査では堤体上部盛土層に多量の瓦類が含まれている。これは指摘されているよう心合寺跡周辺の土が運ばれてものと考えられることから、心合寺に関する遺構は削平されている可能性がある。

以上が新池堤体改修工事のための発掘調査で確認できた事項である。今回は学術調査ではなく、工事に並行した緊急発掘調査であり、調査位置や掘削深度が決められていたため、現段階では多くの不明事項を残している。すなわち、古墳築造時の堤体の位置やレベルなどである。第3次調査における約4m下にある最古の堤体は奈良～平安時代もので、下部層に本米の堤体が在るのかも知れないが、平成9年度試掘および立会調査で指摘されているように、心合寺が周濠を埋めた整地面に建立された可能性もあり、このときに本来の堤体も整地あるいは再構築したことも想定でき、確実なところはわからない。さらに上記で述べた水成堆積層の有無にしても堤体の盛土としての使用あるいは池底のさらいなどによって削平されたことも考えられる。しかし、このように限られた範囲での調査ではあったが、古墳築造時の環境を復元を考えるうえでの資料を提供できるものであり、今後の整備あるいは調査の方向性を定めることができよう。

#### 〈主要参考文献〉

- ・ 米田敏幸 1985 「心合寺山古墳東側外堀2次発掘調査概要」『八尾市文化財紀要1』八尾市教育委員会
- ・ ゆ 1992 「史跡心合寺山古墳前方部里道の発掘調査」『八尾市文化財紀要6』八尾市教育委員会
- ・ 吉田野乃 1996 「史跡整備事業調査報告1 史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書」八尾市教育委員会
- ・ ゆ 1998 「史跡心合寺山古墳 新池堤体改修に伴う試掘調査(平成9年度)」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書II』八尾市教育委員会

- ・吉田野乃 1998『八尾市文化財紀要8－史跡 心合寺山古墳第5次発掘調査概報－』八尾市教育委員会
- ・　　〃 1999『史跡心合寺山古墳新池改修工事に伴う立会調査(平成9年度)』『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書II』八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1999『八尾市文化財紀要9－史跡 心合寺山古墳第6次発掘調査概報－』八尾市教育委員会
- ・吉田野乃 2000『史跡・心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う調査(平成10年度)』『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書II』八尾市教育委員会
- ・　　〃 2000『史跡・心合寺山古墳(現状変更)の調査』『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書II』八尾市教育委員会
- ・吉田野乃編 2001『史跡整備事業調査報告2 史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1990『心合寺山古墳(SO89-1)』『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1999『心合寺山古墳第2次調査(SO97-2)』『(財)八尾市文化財調査研究会報告62』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・　　〃 2000『心合寺山古墳第3次調査(SO98-3)』『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・　　〃 2001『心合寺山古墳第4次調査(SO99-4)』『(財)八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本 徹 1997『古墳時代葬送儀礼専業集落についての覚書』『大阪文化財研究 第12号』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・森田 勉 1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- ・森島康雄 1990『中河内の羽釜』『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会
- ・川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』64巻2 日本考古学会



心合寺山古墳全景と調査区(上が北)



第1区全景(北より)



第2区～7区全景(西より)



石積み遺構と現在の流路(西より)



石積み遺構(西より)



中近世流路(西より)



砾敷遺構(西より)



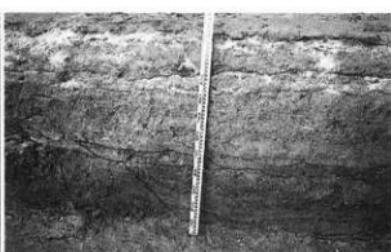
第4区 中近世遺構面(南より)



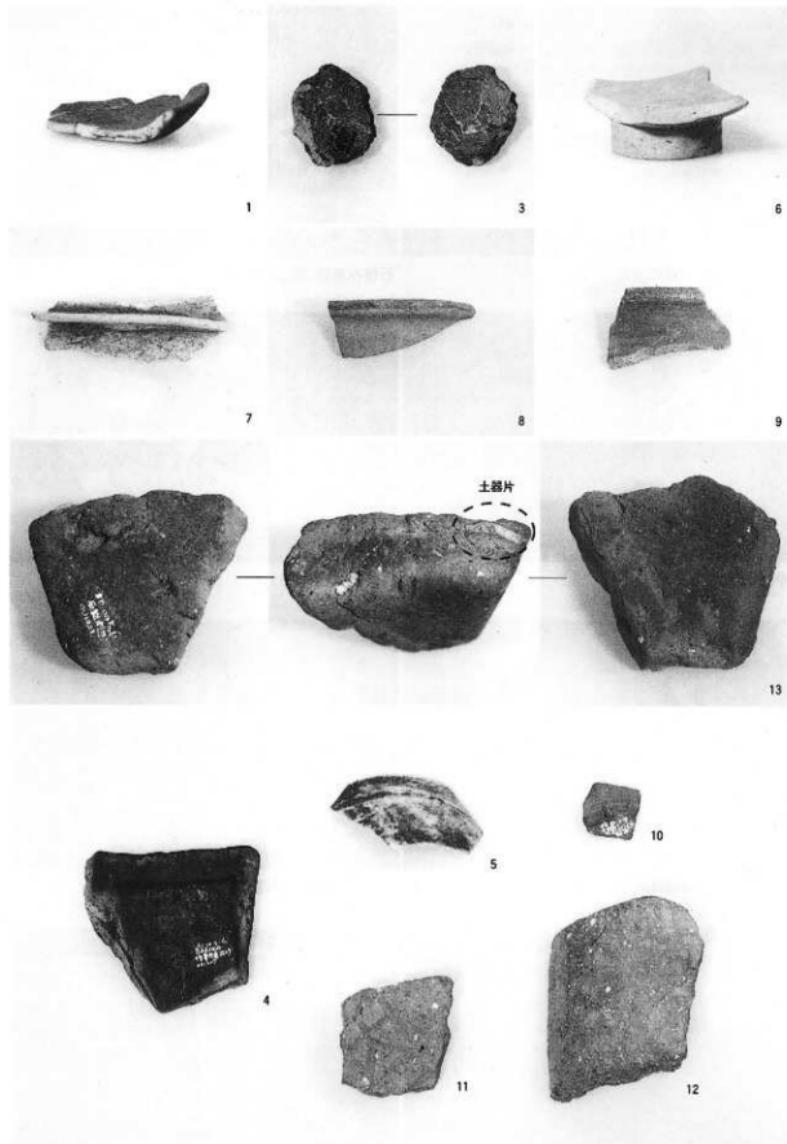
古墳時代以前の流路(東より)



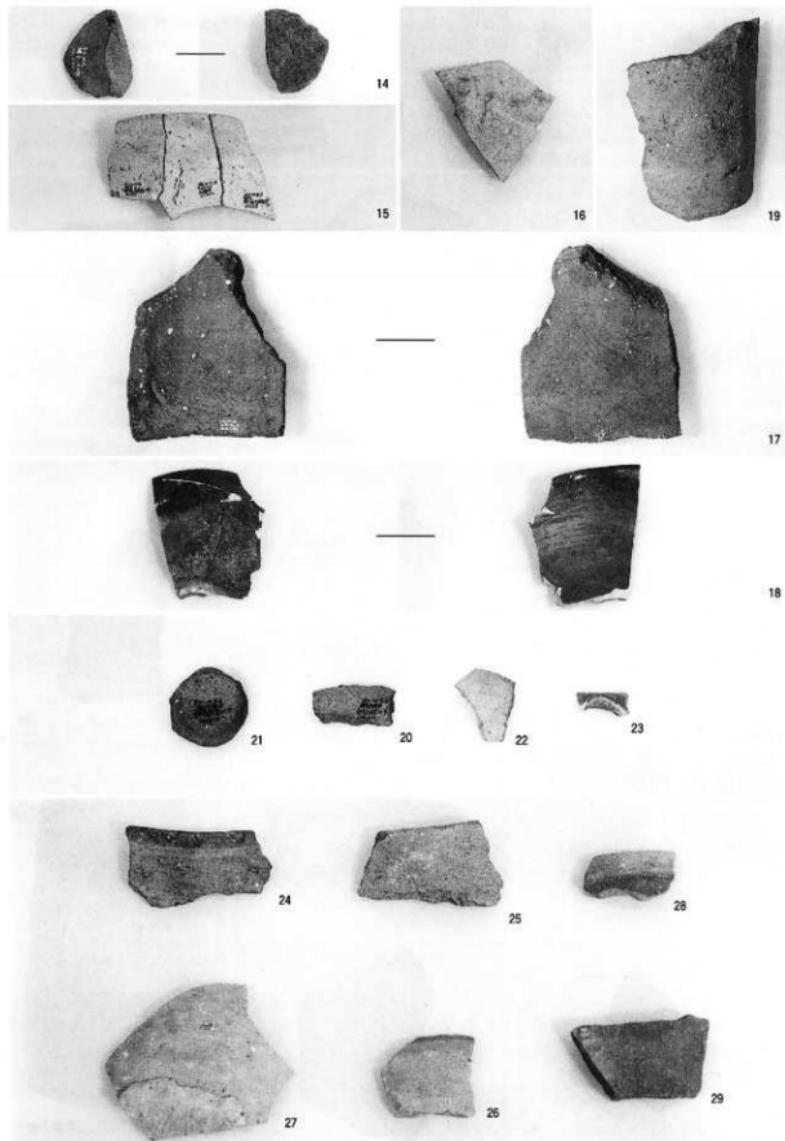
第3区 南北セクション(西より)



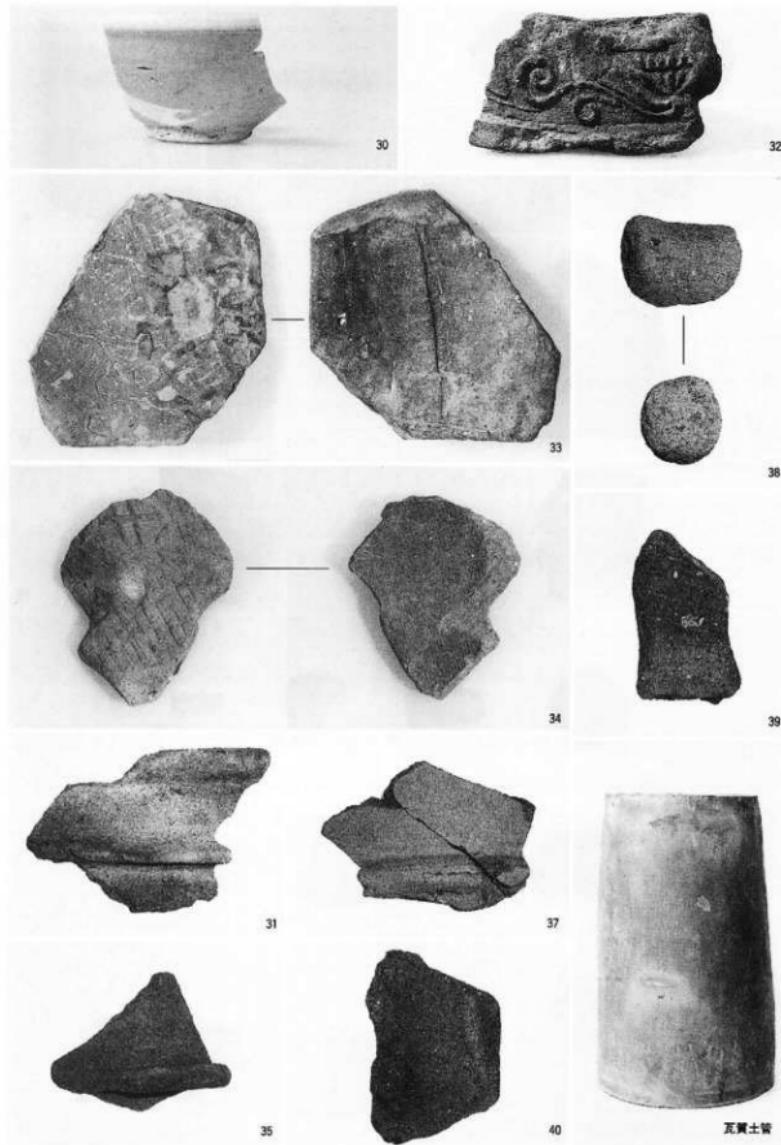
上記流路の北壁の一部(南より)



第5次調查(SO2000-5)出土遺物



第5次調査(SO2000-5)出土遺物



第1次調查(SO89-1)出土遺物

V 中田遺跡第46次調査 (N T 2000-46)

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市刑部3丁目地内で実施した公共下水道工事（11-61工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第46次調査（NT2000-46）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第616号 平成12年2月25日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年6月5日～6月16日（実働5日間）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約20m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査に参加した補助員は長池豊子である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時行い、平成13年9月に終了した。内業整理には上記のほか、岩本順子が参加した。
1. 本書の執筆・編集は、高萩が行った。

## 本　　目　　次

1.はじめに.....	41
2.調査概要.....	42
1) 調査の方法と経過.....	42
2) 基本層序.....	42
3) 検出遺構と出土遺物.....	45
3.まとめ.....	46

## V 中田遺跡第46次調査(NT2000-46)

### 1. はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同一沖積地上には、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡、北に小阪合遺跡が接している。

当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された。それ以後、中田遺跡調査会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施され、弥生時代前期～近世に至る複合遺跡であることが確認されている。特にこれらの調査成果では古墳時代初頭～前期の時期を中心としたものが遺跡全体で検出されている。

今回の調査地は中田遺跡範囲の南東部付近にあたり、周辺では当調査区南側の道路上で、当調査研究会による公共下水道工事に伴う第42次発掘調査(NT98-42)を実施し、古墳時代中期の古墳に関連する遺構を検出しており、その遺構内から土師器・須恵器(蓋杯・高杯・器台など)・埴輪(円筒・朝顔形埴輪・蓋・人物?などの形象埴輪)が多く出土している。さらにその周辺では下図に示すように数十次の発掘調査を実施しており、弥生時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。



第1図 調査地周辺図および位置図(S=1/5000・S=1/125)

## 2. 調査概要

### 1) 調査の経過と方法

今回の発掘調査は公共下水道工事（11-61工区）に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で行った第46次調査にあたる。調査区は人孔（マンホール設置）部分の5箇所で、掘削工事により破壊される部分を対象に調査を実施した。規模は約2.1×1.8mを測る。調査区名は調査順に第1区～5区と称した。

調査に際しては、現表土（T.P.+10.9m）下1.2～1.5m前後までを機械および人力の併用で掘削した後、以下各人孔の工事掘削深度までについては簡易矢板を打ち付けた後、機械による掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下約0.5～1.5m前後は既往埋設工事により削平されているのが、第1区～第4区で確認された。また、現地表下約1.5mから工事掘削深度までは簡易矢板を打ち付けており、ごく一部の断面観察にとどまった。

### 2) 基本層序

各調査区の層序について概説する。

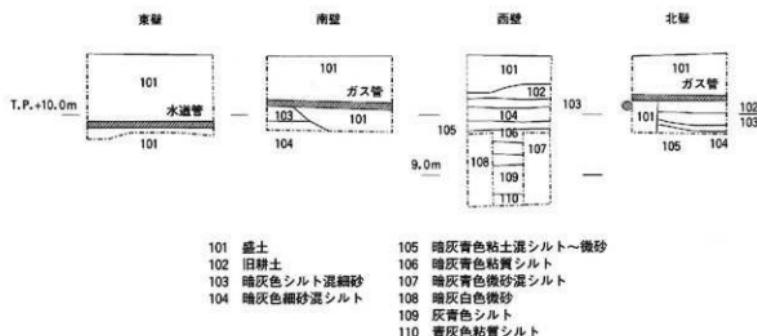
#### 第1区

- 第101層 盛土。層厚50～110cm。既往埋設工事（ガス・水道管など）の際に埋めた土層である。上面の標高はT.P.+11.9m前後である。
- 第102層 旧耕土。層厚10～25cm。昭和前半までの耕作土。
- 第103層 暗灰色シルト混細砂。層厚15cm。しまりがなく、やわらかい。
- 第104層 暗灰色細砂混シルト。層厚20cm。第103層と同じでしまりがなく、やわらかい。
- 第105層 暗灰青色粘土混シルト～微砂。層厚15cm前後。
- 第106層 暗灰青色粘質シルト。層厚20cm。植物遺体を含む。
- 第107層 暗灰青色微砂混シルト。層厚20cm前後。植物遺体を含む。また、中世の瓦片を1点包含する。
- 第108層 暗灰白色微砂。層厚15cm。
- 第109層 灰青色シルト。層厚50cm。
- 第110層 青灰色粘質シルト。層厚20cm。

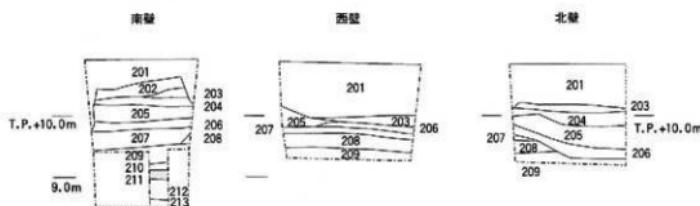
#### 第2区

- 第201層 盛土。層厚60～90cm。既往埋設工事（ガス・水道など）の際に埋められた土層である。上面の標高はT.P.+10.9m前後である。
- 第202層 旧耕土。層厚20cm前後。
- 第203層 オリーブ灰色砂質土（第203層細砂）。層厚10～15cm。
- 第204層 灰白色細砂。層厚10～20cm。
- 第205層 暗青灰色砂礫混シルト。層厚15～40cm。東へ落ち込む。
- 第206層 暗青灰色粘質シルト。層厚10～30cm。植物遺体を含み、やわらかい。東へ落ち込む。
- 第207層 灰色微砂。層厚10～30cm。やわらかい。
- 第208層 青灰色粘質シルト。層厚25cm。植物遺体を少量含む。土師器の小片が出土。
- 第209層 暗青灰色粘質土。層厚30cm。

## 第1区



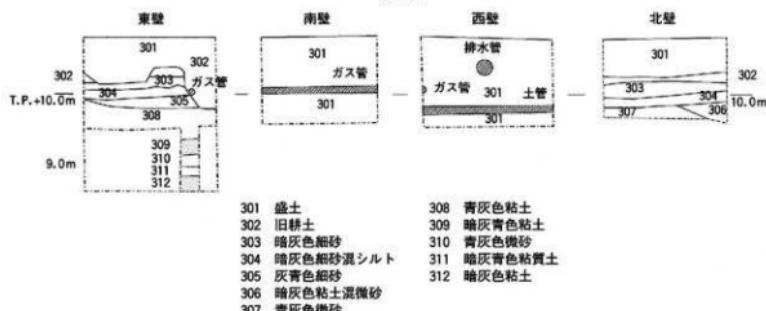
## 第2区



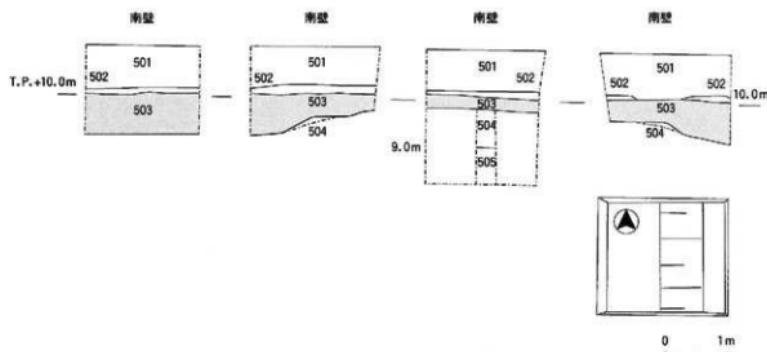
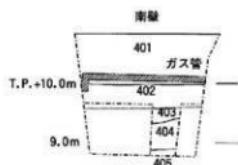
- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| 201 盛土              | 209 暗青灰色粘質土            |
| 202 旧耕土             | 210 暗青灰色粘質シルト          |
| 203 オリーブ灰色砂質土(3'細砂) | 211 青灰色シルト             |
| 204 灰白色細砂           | 212 淡灰青色シルト(ブロック灰青色粘土) |
| 205 暗青灰色砂混シルト       | 213 青灰色粗砂混シルト          |
| 206 暗青灰色粘質シルト       |                        |
| 207 灰色微砂            |                        |
| 208 青灰色粘質シルト        |                        |

第2図 第1・2区断面図(S=1/80)

### 第3区



### 第4区



第3図 第3～5区平断面図(S=1/80)

- 第210層 暗青灰色粘質シルト。層厚10cm。
- 第211層 青灰色シルト。層厚15cm。
- 第212層 淡灰青色シルト(ブロックで灰青色粘土)。層厚35cm。植物遺体を少量含む。古墳時代前期の土師器片を出土。
- 第213層 青灰色粗砂混シルト。層厚10cm。
- 第3区**
- 第301層 盛土。層厚50~120cm。既往埋設工事(ガス・水道など)の際に埋められた土層である。上面の標高はT.P.+10.9m前後である。
- 第302層 旧耕土。層厚15cm。
- 第303層 暗灰色細砂。層厚10~25cm。
- 第304層 暗灰色細砂混シルト。層厚15~20cm。
- 第305層 灰青色細砂。層厚20cm。やわらかい。
- 第306層 暗灰色粘土混微砂。層厚50cm。植物遺体を少量含む。
- 第307層 青灰色微砂。層厚20cm。やわらかい。
- 第308層 青灰色粘土。層厚20cm。
- 第309層 暗灰青色粘土。層厚25cm。粘着性があり、少量の炭や土師器片を含む。
- 第310層 青灰色微砂。層厚20cm。やわらかい。
- 第311層 暗灰青色粘質土。層厚15cm。植物遺体を少量含む。
- 第312層 暗灰色粘土。層厚25cm。植物遺体を少量含む。古墳時代前期の土師器片を出土。
- 第4区**
- 第401層 盛土。層厚80~100cm。既往埋設工事(ガス・水道など)の際に埋められた土層である。上面の標高はT.P.+10.9m前後である。
- 第402層 暗オリーブ灰色細砂。層厚40cm。やわらかい。
- 第403層 オリーブ灰色細砂混シルト。層厚20cm。
- 第404層 灰青色粘土。層厚50cm。炭化物を微量に含む。
- 第405層 灰青色細砂混シルト。層厚10cm。植物遺体を少量含む。
- 第5区**
- 第501層 盛土。層厚60~70cm。既往埋設工事(ガス・水道など)の際に埋められた土層である。上面の標高はT.P.+10.9m前後である。
- 第502層 旧耕土。層厚10~15cm。
- 第503層 暗灰褐色砂礫混シルト質土。層厚35~70cm。古墳時代~奈良時代の遺物を含む。
- 第504層 暗灰色砂礫土。層厚65cm。1~4cmの礫を含む。
- 第505層 暗灰橙色粗砂。層厚60cm。1~5mm砂粒。

### 3) 検出遺構・出土遺物

#### 第1区

第42次調査(NT98-42)の第2区の北約20mに位置する調査区である。現地表下約1.6m前後までは、東・西・北側が埋設工事(ガス管・水道管など)の埋め土であった。南部の一部で表

土からの地層がみられた。現地表下1.5~1.6m (T.P. +9.2~9.3m) に堆積する第107層から中世以降と思われる丸瓦の小片が1点出土しているが、遺構と見られるものは調査区内ではなかった。

#### 第2区

第1区より北へ約8mの地点にある。東・西・北側は第1区同様、現地表下約0.8~1.4m前後までは埋設工事の埋め土である。南側の一部で表土から堆積している状況が確認できた。この調査区では現地表下1.5m付近に堆積する第206層・第207層が東側へ落ち込んでおり、高低差は約0.3mを測る。その下の第208層では土師器の小片が含まれていた。また、現地表下約1.9~2.1mの第212層で古墳時代前期の土師器片がごく少量出土した。

#### 第3区

第2区より北へ約8mの地点にある。現地表下約1.5m前後までは第2区と同様、埋設工事の埋め土である。以下、工事掘削基底面では細砂層第303・305層がみられた。その層から激しく湧水が吹き出しており、下層については綿密な調査ができなかった。

#### 第4区

第3区より北へ約10mの地点にある。現地表下約1.5m前後までは第3区で検出した埋設工事の埋め土である。以下、工事掘削基底面では細砂層第402層がみられた。その層より激しく湧水が吹き出した。

#### 第5区

第4区より西へ約100mの地点にある。現地表下約0.7m前後までは埋め土である。以下、旧耕土を全体で確認しており、埋設物による削平を受けていなかった。旧耕土の直下からは古墳時代～奈良時代の土師器・須恵器などの遺物を含む層第503層が厚く堆積しているのが確認された。また、この層は東側へ落ち込んでおり、深い部分では約0.8mの層厚を測る。

### 3.まとめ

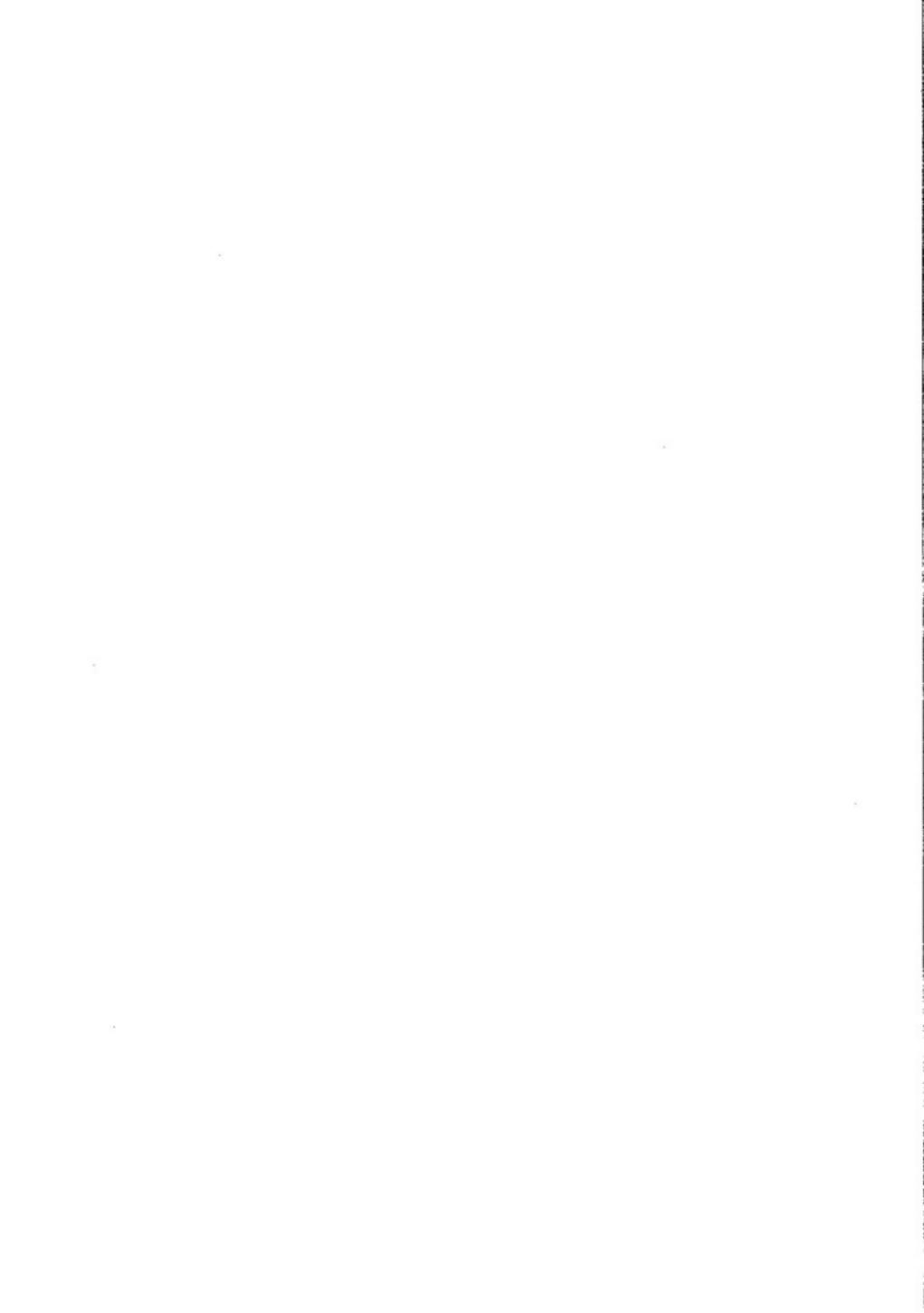
今回の調査では、古墳時代前期～中世の遺物を包含する地層を検出したが、明確に遺構と思われるものはみられなかった。地層観察の結果、東部（第1～4区）と西部（第5区）とは地層の様相、および古墳時代の地層のレベル高が異なっている。第5区ではT.P.+10.0mであるのに対して、第1～4区はT.P.+9.0mであり、東部が約1.0m低いことが言える。第5区の周辺で行った既往調査（N T94-24・N T99-44）でも周辺（西側および東側）で行った調査の検出レベルと比較すると約0.5~1.0m高いことが見え、旧刑部村は古墳時代前期の時期から高い部分であったことがわかった。この高い部分は厚く堆積する砂層であることが調査により確認されていることから河川埋没による自然堤防の高まりである。この高まりは古墳時代前期～現在に至る長期間の間安定した場所であったことがうかがえる。

#### 参考文献

- 成海佳子 1988「24. 中田遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会 報告16
- 坪田真一 2000「<sup>Ⅳ</sup> 中田遺跡第42次調査(N T98-42)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』八尾市文化財調査研究会



1区下層(北から) 2区下層(北から)  
3区上層(南から) 3区上層(西から)  
4区下層(南から) 5区上層(西から)  
5区下層(東から)



VI 東弓削遺跡第11次調査 (HY2000-11)

## 例 言

1. 本書は大阪府八尾市八尾木東2丁目、大字八尾木、大字刑部地内で実施した公共下水道工事(12-6工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東弓削遺跡第11次調査(HY2000-11)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教社文第119号 平成12年6月8日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年10月13日～10月19日(実働3日間)にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約41m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査に参加した補助員は長池豊子・多田一美である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時行い、平成13年5月に終了した。内業整理には上記のほか、都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・編集は、高萩が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	49
2.調査概要.....	51
1) 調査の方法と経過.....	51
2) 基本層序.....	51
3) 検出遺構と出土遺物.....	52
3.まとめ.....	52

## VI 東弓削遺跡第11次調査(H Y2000-11)

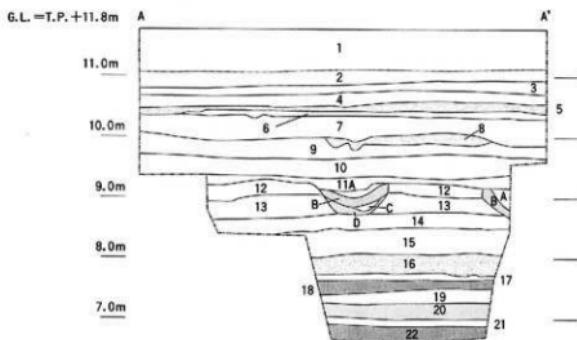
### 1. はじめに

東弓削遺跡は八尾市の中央より、やや南方に位置する。現在の行政区画では八尾木1~6丁目、八尾木東1~3丁目、八尾木、刑部、都塚、東弓削、東弓削1~3丁目がその範囲とされている。当遺跡は旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上の地形に位置している。また、同一沖積地上には北西に中田遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・矢作遺跡・成法寺遺跡・萱振遺跡が連線と連なり、玉串川を挟んだ東側には恩智遺跡、長瀬川を挟んだ南側には弓削遺跡、西側には老原遺跡が存在する。

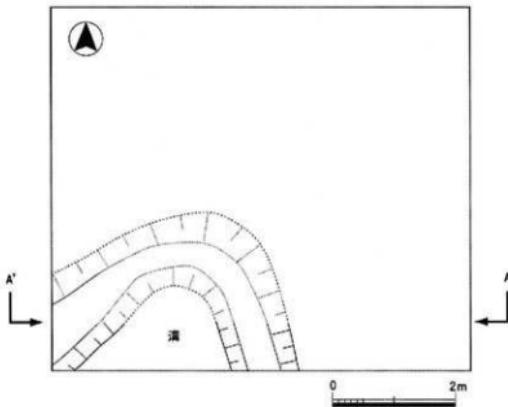
当遺跡内では、当調査研究会が10件の調査を行っている。また、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会により発掘調査および遺構確認調査が実施されており、これまでの調査の結果では、弥生時代前期～中世に至る複合遺跡であることが判明している。今回の調査地は遺跡範囲の東部に位置し、今まで調査があまりなされていない箇所である。最も近接している調査地は八尾市教育委員会が昭和50年度に実施した送水管布設工事に伴う調査で、当地より西へ約350mの地点にあたる。



第1図 調査地周辺図( $S = 1/5000$ )及び調査区位置図( $S = 1/1000$ )



- 1 盛土・耕土  
2 乳灰茶色細砂  
3 淡褐灰色細砂混微砂  
4 淡灰褐色粗砂混シルト  
5 茶灰色細砂  
6 灰茶色細砂混じり粘質土（中世耕土？、瓦器・土器等  
ごく微量に含む）  
7 灰茶色粘質土（褐色斑点、腐敗した樹木の根）  
8 淡茶色粗砂（礫混じる。ごく微量に土器等含む）  
9 淡灰青色粘質シルト  
10 淡灰青色粘土（粘着性あり）  
11 淡灰茶色粘土  
12 青灰色粘質土  
13 青灰色粘質シルト  
14 灰青色粘質土  
15 青灰色粘土  
16 淡青灰色細砂（微砂含む）  
17 暗灰色シルト混じり粘質土（植物遺体含む）  
18 灰黑色粘土（炭化した植物遺体、炭酸カルシウム塊含む。粘着性あり）  
19 乳青灰色粘土（炭酸カルシウム塊含む）  
20 暗灰色粘土（粘着性あり）  
21 灰青色粘土  
22 灰黑色粘土（粘着性あり）
- 溝 A 乳灰青色微砂  
B 暗灰青色粘質シルト  
C 灰青色粗砂  
D 灰灰青色粘質土



第2図 調査区平面面図(S=1/80)

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事(12-6工区)に伴うもので、当調査研究会が東弓削遺跡内で行った第11次調査(H Y2000-11)にある。調査区は発進立坑部分の1箇所である。規模は東西約6.8m×南北約6.0m(面積約41m<sup>2</sup>)の方形である。調査については八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に従い、発掘調査を実施した。調査期間は、平成12年10月13日～19日(実働3日間)である。

調査に際しては、一次掘削として現表土(T.P.+11.8m)下1.0～1.8mまでの地層について機械による慎重掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。また、二次掘削として現地表下1.8～3.5mまでの地層について、機械および人力による調査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。さらに現地表下5.2m前後の深さまで、地層の観察を行った。

### 2) 基本層序

調査区の層序について概説する。

- 第1層 盛土・耕土。層厚0.8m前後。北半部は道路部分(現地表=T.P.+11.8m)で、盛土およびアスファルト舗装がされている。南半部は現在使用している水田耕土で、道路面より約0.5m前後低い。
- 第2層 乳灰茶色細砂。層厚0.2m前後。1～3mm前後の砂粒。
- 第3層 淡褐色細砂混微砂。層厚0.1～0.2m。ほぼ水平方向のラミナが僅かにみられる。
- 第4層 淡灰褐色粗砂混シルト。層厚0.2m前後。
- 第5層 茶灰色細砂。層厚0.1m前後。洪水層。
- 第6層 灰茶色細砂混じり粘質土。層厚0.05～0.1m。中世ないしは中世以後の耕土。足跡と思われる凹みが若干みられる。ごく微量に土師器・瓦器の小片を含む。
- 第7層 灰茶色粘質土。層厚0.3～0.4m。褐色(酸化鉄分)の斑点。
- 第8層 淡茶灰色粗砂。層厚0.15m前後。ごく少量の砂礫が混じる。ごく微量に土師器の小片を含む。
- 第9層 淡灰青色粘質シルト。層厚0.2～0.3m。
- 第10層 淡灰青色粘土。層厚0.2～0.3m。粘着性のある粘土。
- 第11層 淡灰茶色粘土。層厚0.1～0.25m。
- 第12層 青灰色粘質土。層厚0.2m。
- 第13層 青灰色粘質シルト。層厚0.2～0.3m。
- 第14層 灰青色粘質土。層厚0.25m前後。
- 第15層 青灰色粘土。層厚0.4m前後。
- 第16層 淡青灰色細砂。層厚0.3m前後。1mm前後のやや細かい砂粒。
- 第17層 暗灰色シルト混じり粘質土。層厚0.1m前後。
- 第18層 灰黒色粘土。層厚0.15～0.2m。炭化した植物遺体・炭酸カルシウム塊を含む。粘着性がある粘土でやわらかい。
- 第19層 乳青灰色粘土。層厚0.2m前後。炭酸カルシウム塊を含む。

- 第20層 暗灰色粘土。層厚0.25m。粘着性のある粘土。
- 第21層 灰青色粘土。層厚0.15m。
- 第22層 灰黒色粘土。層厚0.25m以上。粘着性のある粘土で、炭化した植物遺体を含む。
- 第A層 乳灰青色微砂。層厚0.1m前後。
- 第B層 暗灰青色粘質シルト。層厚0.15m前後。炭化した植物遺体を含む。
- 第C層 灰青色粗砂。層厚0.1m前後。
- 第D層 暗灰青色粘質土。層厚0.15m前後。炭化した植物遺体を含む。

### 3) 検出遺構と出土遺物

現地表下約1.5m (T.P. +10.4m) 前後の第6層上面は、中世ないしはそれ以後の水田面と思われる。畦畔の高まりは見られなかったが、足跡と思われる凹みが見られた。また、現地表下約2.6m (T.P. +9.2m) 前後の第12層上面から断面椀状を呈する溝1条を検出した。平面的な調査はできなかったが、壁断面の観察では幅約1m前後、深さ0.5mを測り、埋土はレンズ状に堆積する（第A～D層）。内部からは遺物の出土はなかったが、第B・D層には炭化した植物遺体が含まれていた。溝は調査区内で平面やや「く」字形を呈している。溝底は東がT.P. +8.7m前後で、西がT.P. +8.65m前後を測り、西がやや低い。

### 3.まとめ

今回の調査地は当遺跡の東部にあたり、あまり調査が行われていない所である。遺構・遺物の有無についても想定できない地域である。当遺跡の北部や西部では古墳時代前期（庄内式期新相～布留式古相）を中心とした遺構・遺物が検出されており、当地でもこの時期に相当するものが想定されたが、調査の結果、古墳時代前期の時期に対応する遺構・遺物は確認できなかった。また、当地の南西部一帯は「西の京」の推定地であり、これらの存在が当地まで及んでいる可能性も考えられたが、調査区内ではこの時期に対応するものは見られなかった。

今回、現地表下5.2m (T.P. +6.6m)までの地層について観察ができた。面的に捉える層としては現地表下1.5m前後で検出した中世期の生産域と、時期不明の溝を検出した第11層上面である。それより以下の地層では洪水層と思われる砂層がなく、植物遺体を含む粘土および粘質シルトを基調としたもので、当地は湿地帯であったことが推定される。

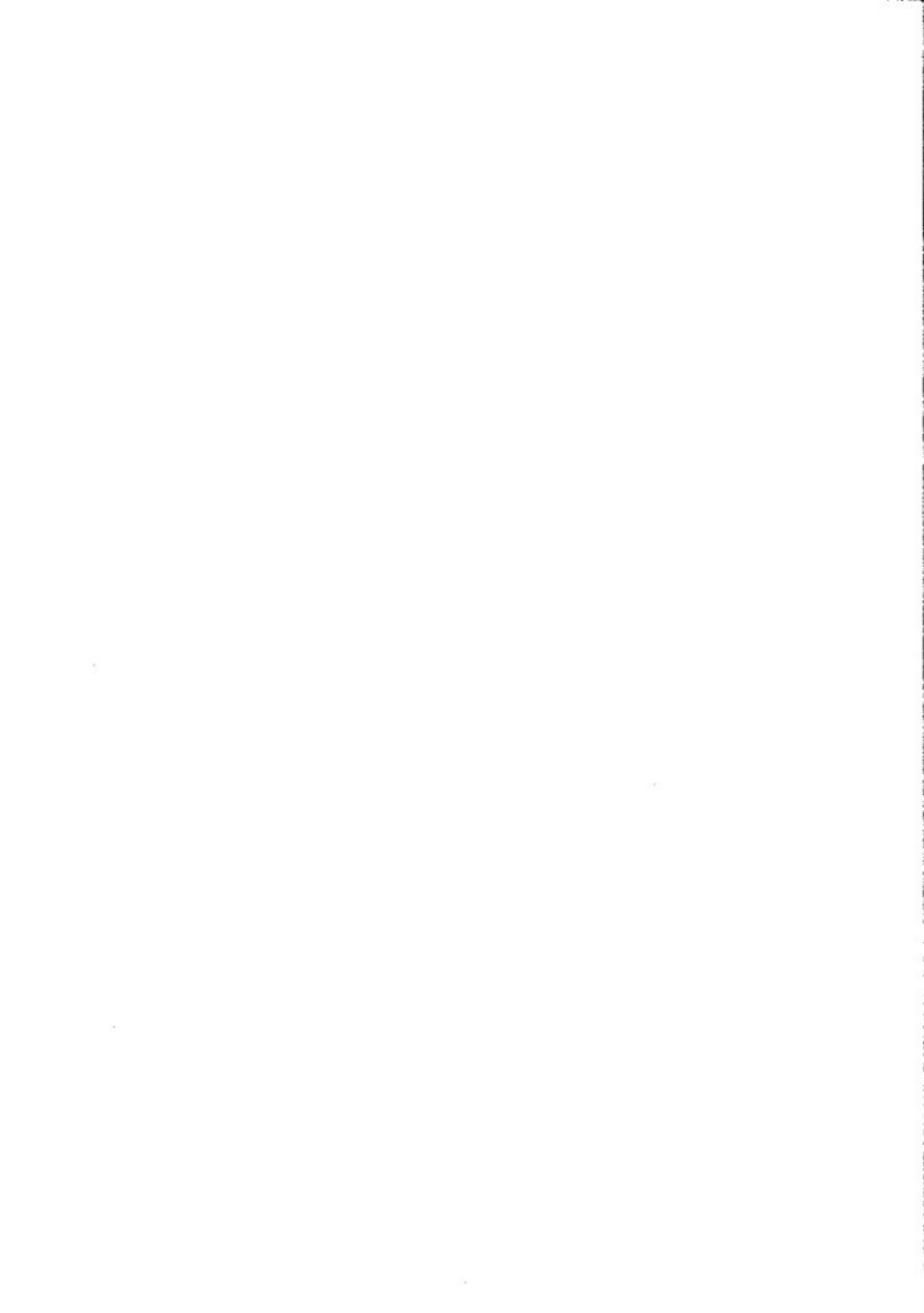
### 参考文献

- ・山本 昭 1976 『東弓削遺跡』八尾市文化財調査報告3 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1983 「9 東弓削遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1993 「I 東弓削遺跡第4次調査(H Y88-4)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会



調査区南部<T.P.+9.5~11.0m>(東から)  
南壁西側<T.P.+9.5~11.0m>  
南壁<T.P.+8.5~9.5m>

南壁東側<T.P.+9.5~11.0m>  
調査区南部<T.P.+8.5~9.5m>(東から)  
下層確認(東から)



VII 宮町遺跡第3次調査（MM2000-3）

## 例 言

1. 本書は大阪府八尾市宮町1丁目地内で実施した公共下水道工事（10-202工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する宮町遺跡第3次調査（MM2000-3）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第304号 平成12年9月7日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年5月23日～6月1日（実働3日間）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約35m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査に参加した補助員は長池豊子である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時を行い、平成13年5月に終了した。内業整理には上記のほか、田島和恵が参加した。
1. 本書の執筆・編集は、高萩が行った。

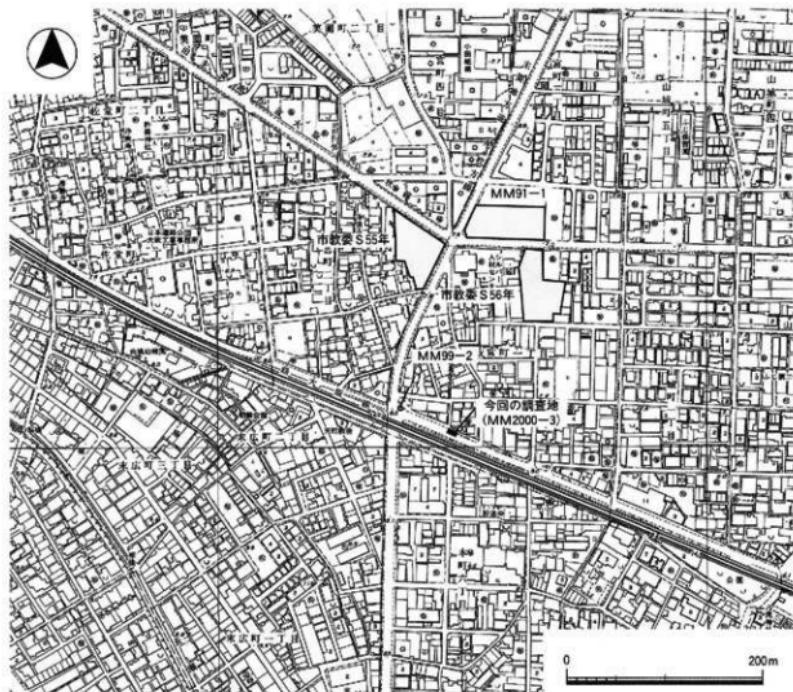
## 本 文 目 次

1.はじめに.....	55
2.調査概要.....	56
1) 調査の方法と経過.....	56
2) 層序.....	57
3) 検出遺構と出土遺物.....	57
3.まとめ.....	59

## VII 宮町遺跡第3次調査(MM2000-3)

### 1. はじめに

宮町遺跡は八尾市の北西にあたり、行政区画では宮町1～2丁目、本町6丁目がその範囲とされている。地形的には、旧大和川である長瀬川と楠根川に挟まれた沖積地上に立地し、同一の沖積地上の隣接地では、北西に美園遺跡・佐堂遺跡、東に東郷遺跡、南に八尾寺内町遺跡が位置している。当遺跡では、これまでに穴太神社の北側や西側で八尾市教育委員会および当調査研究会による小規模な調査が数次行われており、平安時代後期～近世の遺構・遺物がその調査によって検出されている。穴太神社境内で実施された調査では、土壇や礎石など遺構とともに瓦が多量に出土されている。『河内鑑名所記』や『和漢三才図会』などの文献では当地周辺が大日山千眼寺の推定地とされている。



第1図 調査地周辺図 ( $S = 1/5000$ )

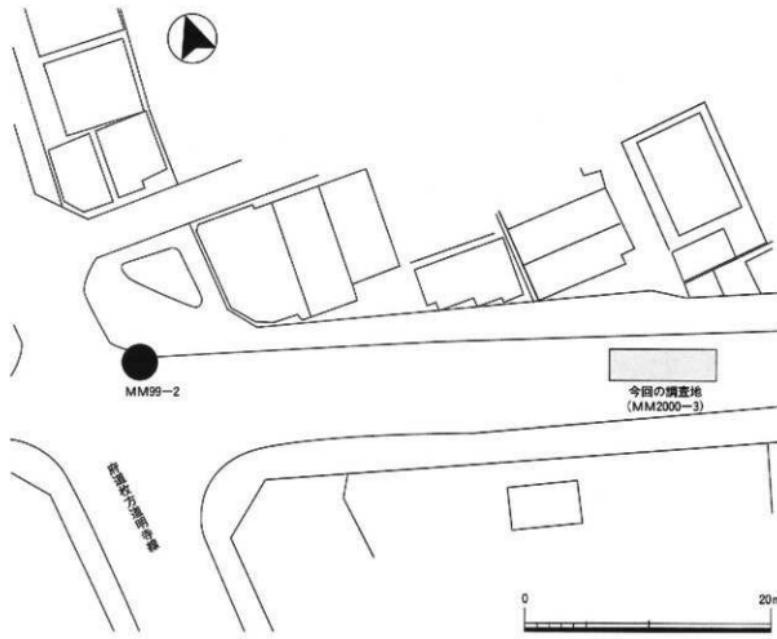
## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、宮町1丁目地内の公共下水道工事(10-202工区)に伴うもので、当調査研究会が宮町遺跡内で実施した第3次調査(MM2000-3)にあたる。調査地は、約8.8×4.0mの東西に長い長方形を呈し、調査面積は約35m<sup>2</sup>を測る。

掘削に際しては、市教育委員会の指示書に基づき、現地表(T.P.+7.83m)下1.0m前後までは機械掘削とし、それ以下の0.5mについては機械と人力を併用しながら掘り進め、遺構・遺物の検出に努めた。さらに、工事掘削深度である現地表下4.6mまでの地層の記録保存を行った。しかし、調査区の東部ではすでに下水管が埋設されており、現地表下約3m前後まで削平されている。さらにその下水管周辺は薬注により地層が凝固しており、地層の観察を断念した。

なお、今回の調査地は、近鉄大阪線の高架の北側に接する道路敷に位置することから、細心の注意を払いながら掘削作業を進めた。当初、夜間に実施する予定であったが周辺住民の要望から日中で行うことになった。そのため、歩道を壊し、迂回路を設置し、交通の妨げにならないよう配慮した。また、今回の調査は、西40mの地点で行った第2次調査(MM99-2)と同じ指示書の調査であった。第2次調査ではライナー部分、今回の調査(第3次調査)は立坑部分を対象として調査を実施した。



第2図 調査地位置図(S=1/400)

## 2) 層序

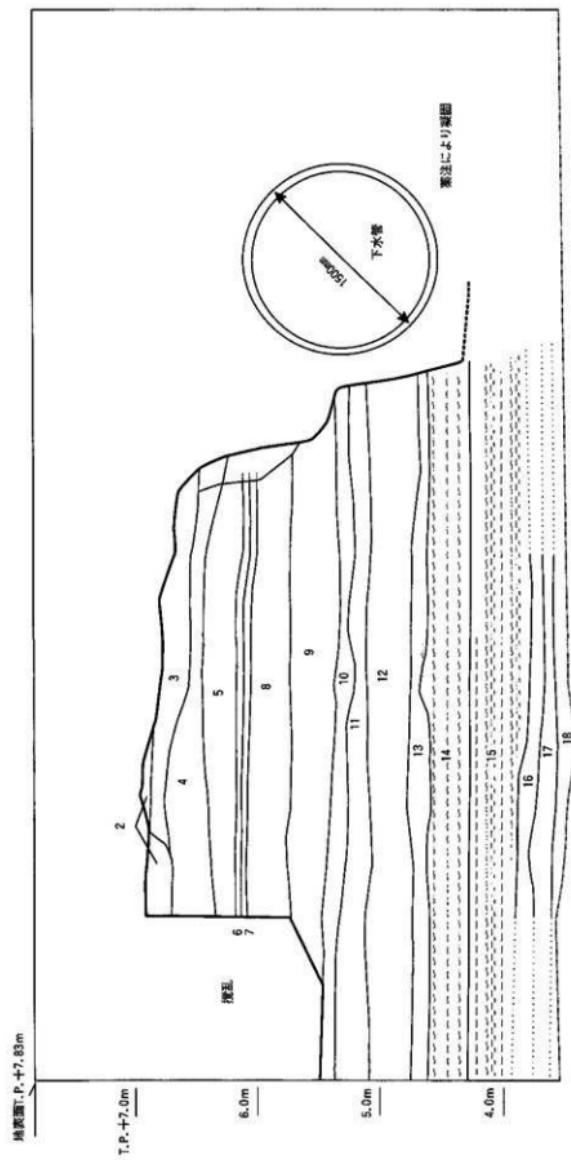
調査では、現地表下4.6m前後の間において18層の地層を確認した。これらの地層は、上方からほぼ水平堆積を呈しており、安定した地層であったと思われる。以下、各地層について概説する。

- 第1層 盛土。層厚90cm。現在の道路拡張および埋設物の工事で埋めた土。東部は径1.5mの下水管が埋められており、現地表下約3.5m前後まで削平されている。
- 第2層 旧耕土。層厚20cm。耕作土または旧表土である。近鉄八尾駅前の区画整理までの地層である。調査区の中央北付近で一部残存する程度で、ほとんどが削平されている。
- 第3層 淡褐色微砂。層厚10~20cm。やわらかい土質。
- 第4層 乳褐色粘質シルト。層厚10~30cm。やわらかい土質。
- 第5層 褐灰色粘質シルト。層厚20~30cm。やわらかく、もろい。ほぼ水平堆積。
- 第6層 明茶灰色粘質シルト。層厚5cm。酸化により堅くしまる。ほぼ水平堆積。
- 第7層 乳灰色粘質シルト~細粒砂。層厚5cm。ほぼ水平堆積。
- 第8層 青灰色粘質シルト。層厚30cm。ほぼ水平堆積。
- 第9層 青灰色粘質土。層厚30~40cm。ほぼ水平堆積。
- 第10層 暗青灰色シルト混粘土。層厚10~15cm。ほぼ水平堆積。
- 第11層 乳青灰色微砂。層厚10~20cm。植物遺体や雲母を多く含む。やや西下がりのラミナがみられる。ほぼ水平堆積。
- 第12層 暗灰色粘質土。層厚30~40cm。カルシウム塊が微量に含まれる。ほぼ水平堆積。
- 第13層 灰色細砂混粘質土。層厚10cm。ほぼ水平堆積。
- 第14層 灰黒色シルト混粘土。層厚30cm。ほぼ水平堆積。
- 第15層 淡褐色微砂。層厚40~50cm。ほぼ水平堆積。
- 第16層 淡青灰色微砂。層厚10cm。ほぼ水平堆積。
- 第17層 灰青色粘質土。層厚10~15cm。粘着性があり、水平ラミナ状に薄く堆積する植物遺体の層が4~6条みられる。ほぼ水平堆積。
- 第18層 青灰色粘土。層厚10cm以上。粘着性があり、水平ラミナ状に薄く堆積する植物遺体の層が5~8条みられる。ほぼ水平堆積。
- A層 第4層が青色に変色した層。
- B層 第5~8層の暗青色に変色したもの。下水管埋設によるものと思われる。
- 第5~18層はほぼ水平堆積を呈し、第17・18層では薄く堆積する植物遺体層が何条にもみられることから沖積地では比較的安定していたところであることがうかがえる。

## 3) 検出構造と出土遺物

調査の結果、遺構・遺物の検出はなかった。しかし、現地表下4.6mの地層観察ができ、当地の自然環境を復元する一資料が得られた。

第3図 北壁断面図 ( $S = 1 / 40$ )



### 3.まとめ

今回の調査では遺構・遺物はなかった。しかし、地層観察の結果では微砂～シルト・粘土がほぼ水平堆積状況を呈していることから安定していたことが明らかである。しかし、西40mの第2次調査(MM99-2)では砂層を基調とした堆積を呈しており、河川の流路があつたものと思われる。また、当地から北約300mの地点で実施した第1次調査(MM91-1)では、現地表下1.0m(T.P.+6.6m)前後において14世紀前半～16世紀初頭の遺構を検出しているが、南側に位置する当地周辺では生産域が展開されていた可能性がうかがえる。

### 参考文献

- ・米田敏幸・原田昌則・駒沢教 1982.3 「宮町遺跡発掘調査概要I -穴太神社境内廃千眼寺の調査-」八尾市文化財調査報告8 昭和56年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1983 「第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1983 「第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度(財)八尾市文化財調査研究会報告3』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1995 「II 宮町遺跡第1次調査(MM91-1)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告45」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一・樋口 篤 2001 「XI 宮町遺跡第2次調査(MM99-2)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告67」(財)八尾市文化財調査研究会



調査区西側北壁<T.P. +6.0~7.0m>



調査区西側北壁<T.P. +3.6~4.0m>



調査区西側北壁<T.P. +4.6~5.8m>



調査区西側<T.P. +3.6m 前後>



最終掘削状況<T.P. +3.6m 前後>(西から)



最終掘削状況<T.P. +3.6m 前後>(西から)

VIII 山賀遺跡第11次調査（YMG2000-11）

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市山賀町4・5丁目地内で実施した公共下水道工事（12-20工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する山賀遺跡第11次調査（YMG2000-11）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第219号 平成12年8月3日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年11月1日～11月9日（実働3日間）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約33.28m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査に参加した補助員は多田一美である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時を行い、平成13年9月に終了した。内業整理には上記のほか、田島和恵が参加した。
1. 本書の執筆・編集は、高萩が行った。

## 本　文　目　次

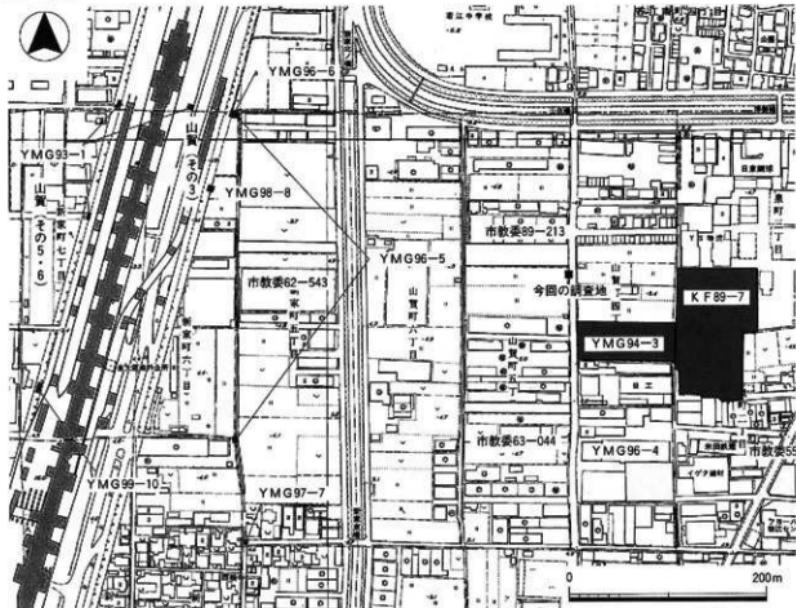
1.はじめに.....	61
2.調査概要.....	62
1) 調査の方法と経過.....	62
2) 基本層序.....	63
3) 検出遺構と出土遺物.....	64
3.まとめ.....	64

## VIII 山賀遺跡第11次調査(YMG2000-11)

### 1. はじめに

山賀遺跡は八尾市の北西部に位置し、東大阪市の南東部にまたがる。現在の行政区画では、新家町1~8丁目・山賀町1~6丁目および東大阪市の若江西新町5丁目・若江南町4~5丁目がその範囲とされている。地理的には旧大和川の主流であった長瀬川・玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、その他数多くの小河川の沖積作用により形成された河内平野の中央部で展開する縄文時代晩期~現在に至る複合遺跡である。

当遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行なわれた楠根川改修工事に伴う掘削残土の中から弥生時代前期の土器類や石器類が多量に発見されたことから周知となった遺跡である。その後、大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター(現、(財)大阪府文化財調査研究センター)、瓜生堂遺跡調査会、東大阪市教育委員会、(財)東大阪市文化財協会、八尾市教育委員会、当調査研究会によって多次にわたる調査が行われてきた。昭和54~60年度の長期にわたる、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道路建設に伴う調査では、縄文時代~近世に至る遺構・遺物が検出された。広範囲に存在することがわかり、複合遺跡として認識されるようになった。特に、弥生時代前期(中段階)の集落の存在は、河内平野の稻作導入期の動向を知る上で貴重な資料となっている。



第1図 調査地周辺図及び位置図(S=1/5000)

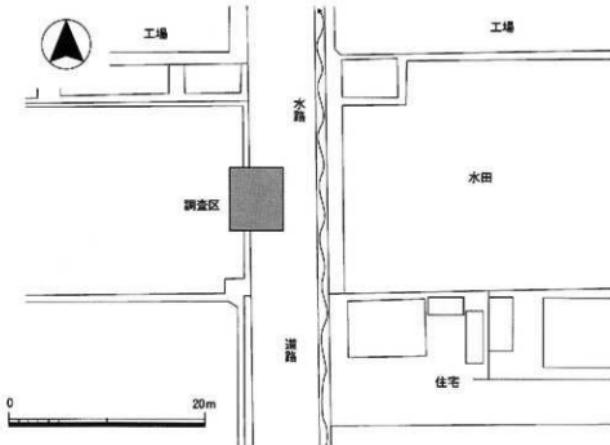
当遺跡の周辺には東に西郡廃寺遺跡、西に小若江北遺跡（東大阪市）、南に友井東遺跡、南東に萱振遺跡、北に若江北遺跡（東大阪市）、北西に上小阪遺跡（東大阪市）など数多くの遺跡が分布している。

今回の調査地は、当調査研究会が実施し、弥生時代前期～近代の地層を確認している第3次調査（YMG94-3）地の北西部に位置している。また、近畿自動車道建設に伴う「山賀遺跡（その3）」の調査地の東部にあたる。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

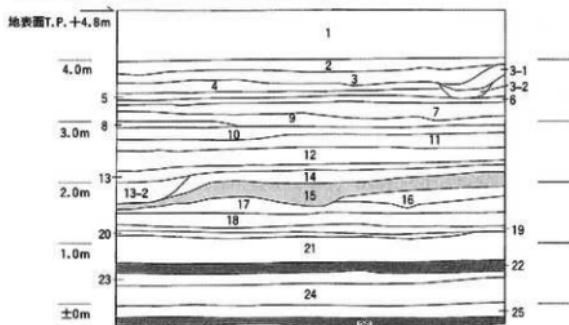
今回の発掘調査は公共下水道工事（12-20工区）に伴うもので、当調査研究会が実施した山賀遺跡内での第11次調査にあたる。調査は公共下水道工事の発進立坑部分が対象で、東西約5.2m×南北約6.4mの方形の立坑である。調査地周辺は中小企業が連なっている道路にあたり、日中は大型トラックなどの往来が絶えないところである。このような交通事情から当初はすべて夜間作業で行われる予定であった。しかし立坑部分の両側は農地が唯一残っているところであり、道路の東には幅約1mの農業用水路が側壁沿いに走っている。その水路を覆うことにより迂回路が確保でき、夜間作業から日中に行うことが可能になった。調査期間は、平成12年11月1日～11月9日（実働3日）にかけて実施した。現地表（T.P.+4.8m前後）下約0.6mは覆鋼板設置のため掘削されており、それより以下の現地表下約5.4m（T.P.-0.6m）まで機械掘削と人力掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。



第2図 調査区位置図(S=1/500)

## 2) 基本層序

- 第1層 盛土。層厚0.8~1.5m。東部は道路敷きで、アスファルト・パラスなどがある。
- 第2層 耕土。層厚0.2m。調査区西部のみにみられる。
- 第3層 オリーブ灰色シルト質土。層厚0.2~0.3m。第3-1層(暗オリーブ灰色シルト質土)と第3-2層(灰茶色シルト質土)が北西部で落込み状に堆積しており、第3-1層内からは近現代の平瓦片が出土している。
- 第4層 淡茶灰色シルト。層厚0.1~0.2m前後。
- 第5層 茶灰色粘質シルト。層厚0.1m。
- 第6層 灰褐色粘土。層厚0.1m。
- 第7層 乳灰茶色微砂~細砂。層厚0.2~0.4m。調査区中央で深くなる(最深部で約0.4mを測る)。
- 第8層 灰色粘質土。層厚0.1~0.2m。
- 第9層 淡灰青色微砂。層厚0.1m。調査区南部のみの堆積である。
- 第10層 灰色シルト。層厚0.1~0.2m。
- 第11層 灰青色粘質土。層厚0.1~0.2m。植物遺体を含む。
- 第12層 暗灰色細砂混粘土。層厚0.2~0.3m。植物遺体を含む。
- 第13層 青灰色粗砂混じり粘質土。層厚0.1m。南西部で第13-2層(青灰色粘土)が第14層を切ったかたちで南へ落ち込んでいる。
- 第14層 暗灰色細砂混じりシルト。層厚0.2m。
- 第15層 灰黒色細砂混粘質土。層厚0.2~0.3m。弥生時代前期の遺物を含む。
- 第16層 淡灰青色細砂混微砂。層厚0.2m。北部に堆積する層で、第15層に削平されている。
- 第17層 乳灰青色粘質土混じり細砂。層厚0.1~0.3m。
- 第18層 灰白色混じり細砂。層厚0.25m前後。
- 第19層 暗灰色粘質土。層厚0.1m。
- 第20層 灰青色微砂。層厚0.05~0.1m。薄く堆積する層で、北部で途切れる。
- 第21層 黒灰色粘土。層厚0.4m。植物遺体を含む。



第3図 西壁断面図(S=1/80)

- 第22層 黒灰色粘土。層厚0.2m。植物遺体を含み、粘着性がある。
- 第23層 青灰色粘土。層厚0.4m。
- 第24層 青灰色粘質シルト。層厚0.2m。
- 第25層 暗灰青色粘土。層厚0.2m。炭化物を含み、粘着性がある。
- 第26層 黒灰色粘土。層厚0.2m以上。粘着性があり、炭化した植物遺体を含む。

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表 (T.P. +4.8m) 下1.5mは道路側壁基礎および既設の埋設物により大部分が削平を受けていた。調査区西のごく一部（借地）では耕土から確認することができた程度である。第1～12層まではほぼ水平堆積を呈しており、比較的安定した層である。また第5層は当地より東100mの萱振遺跡 K F 89-7 調査で古墳時代前期～後期の遺構・遺物を検出しており、それに関連する層に相当するものと思われるが、遺構・遺物はなかった。現地表 (T.P. +1.8m) 下3.0m前後の第13層は当地より南東50mのYMG 94-3 調査で検出している弥生時代前期ごろと思われる包含層を検出した。その層内からごく少量の弥生土器片が出土している。遺構はなかったが、第16・17層上面で緩やかな凹凸がみられる程度であった。

現地表下4.0m (T.P. +0.8m) 前後と4.8m (T.P. ±0 m) で水平に堆積する黒灰色粘土帯（第22層と第26層）がある。この黒色粘土帯は（財）大阪文化財センターが行った近畿自動車道建設に伴う調査で広範囲にわたり、観察されている縄文時代晚期または後期に比定される黒色粘土帯に相当するものと思われる。層厚も0.15m前後で水平堆積を呈している。

### 3.まとめ

今回の調査では弥生時代前期ごろと古墳時代ごろに相当する地層を検出した。弥生時代前期は当調査区の南東約50m地点で当調査研究会が行ったYMG 94-3 調査で検出した遺構面とほぼ同一レベルでみつかっており、弥生時代前期の集落域の拡がりを確認できた。しかし、遺構と思われるものはなく、包含層内の遺物も希薄であった。また、周辺では弥生時代前期～中期に活発な沖積作用があったことが既往調査で観察されている。古墳時代ごろに相当する地層は東部約100mで行った萱振遺跡 K F 89-7 調査と西側隣接地で行った市教委89-213調査で古墳時代前期の遺構・遺物が確認されている層に対応すると思われるが、当地では遺構・遺物の検出はなかった。

下層 (T.P. -0.6～+0.6m) では、（財）大阪文化財センターが行った近畿自動車道建設に伴う山賀遺跡（その3）の調査で確認された時期決定の鍵層となる黒色粘土帯を確認することができた。

#### 参考文献

- ・1983・1984・1986 「山賀（その1）」～「山賀（その5・6）」（財）大阪文化財センター
- ・成海佳子 1994 「IX 山賀遺跡第1次調査（YMG 93-1）」「X 山賀遺跡第2次調査（YMG 93-2）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告43』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1998 「XX 山賀遺跡（第4次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・森木めぐみ 1998 「IX 山賀遺跡第5次調査（YMG 96-5）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告60』（財）八尾市文化財調査研究会
- [註1] 1984・1983 「山賀（その3）」（財）大阪文化財センター



弥生時代前期～中期の調査面(西から)



南壁<T.P. +2.0~3.0m>(南東から)



南壁<T.P. +1.0~2.0m>(北東から)



最終掘削状況<T.P. ±0m>(南から)



# 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいはうこく71						
書名	八尾市文化財調査研究会報告71						
副書名	I 恩智遺跡(第8次調査) II 恩智遺跡(第9次調査) III 亀井遺跡(第11次調査) IV 心合寺山古墳(第5次調査) V 中田遺跡(第46次調査) VI 東弓削遺跡(第11次調査) VII 宮町遺跡(第3次調査) VIII 山賀遺跡(第11次調査)						
巻次							
シリーズ名	財團法人八尾市文化財調査研究会報告						
シリーズ番号	71						
編著者名	I・II 関田清一、III 成海佳子、IV 游 壽、V・VI 雅高萩千秋						
編集機関	財團法人八尾市文化財調査研究会						
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700						
発行年月日	西暦2002年3月29日						
ふりがな 所取遺跡	所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
おんち いせき 恩智遺跡 (第8次調査)	大阪府八尾市恩智中町2・3丁 日地内	27212 20	34度60分 33秒	135度63分 12秒	20010312 ～ 20010330	19	公共 下水道
おんち いせき 恩智遺跡 (第9次調査)	大阪府八尾市恩智中町2・3丁 日地内	27212 20	34度60分 33秒	135度63分 12秒	20010402 ～ 20010529	19	公共 下水道
おんち いせき 亀井遺跡 (第11次調査)	大阪府八尾市亀井町1丁目地 内	27212 26	34度60分 14秒	135度65分 82秒	20010426 ～ 20010428	21	公共 下水道
し し じ せ き こ ふ ん 心合寺山古墳 (第5次調査)	大阪府八尾市大竹5丁目地内	27212 10	34度63分 67秒	135度64分 31秒	20001211 ～ 20001228	93	塗体 改修
お お ち い せ き 中田遺跡 (第46次調査)	大阪府八尾市刑部3丁目地内	27212 28	34度60分 98秒	135度62分 42秒	20000605 ～ 20000616	20	公共 下水道
ひ じ じ い せ き 東弓削遺跡 (第11次調査)	大阪府八尾市八尾木東2丁目、 大字八尾木、大字刑部地内	27212 31	34度60分 45秒	135度62分 50秒	20001013 ～ 20001019	41	公共 下水道
み み ち い せ き 宮町遺跡 (第3次調査)	大阪府八尾市宮町1丁目地内	27212 41	34度62分 92秒	135度59分 89秒	20000523 ～ 20000601	35	公共 下水道
お お ち い せ き 山賀遺跡 (第11次調査)	大阪府八尾市山賀町4・5丁目 地内	27212 32	34度64分 66秒	135度60分 45秒	20001101 ～ 20001109	33.28	公共 下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
恩智遺跡 (第8次調査)	集落	弥生時代前期～中期	河川	弥生土器・石器(石包丁・サヌカイト片)など	
恩智遺跡 (第9次調査)	集落	弥生時代前期～中期	河川	弥生土器・石器(石包丁・サヌカイト片)など	
龜井遺跡 (第11次調査)	集落	弥生時代前期～中期	河川	弥生土器など	
心合寺山古墳 (第5次調査)	古墳	弥生時代後期 古墳構造以前 古墳時代 奈良～平安時代 中世～近世	一 地山 一 一 土坑 石積み遺構・流路に 作る礎敷遺構、近世 の堤と池底面。	弥生土器・石器 埴輪 土師器・瓦 土師器・瓦器・白磁など	古墳築造以前の地山層とそ の上部の地槽層を確認した。
中田遺跡 (第46次調査)	集落	古墳時代前期 中世	落ち込み 一	古式土師器(布留式 土器) 土師器・丸瓦	
東弓削遺跡 (第11次調査)	集落	時期不明 中世	溝 水田面?	一	
宮町遺跡 (第3次調査)	寺院	一	一	一	
山賀遺跡 (第11次調査)	集落	弥生時代前期	一	弥生土器	

## 財団法人八尾市文化財調査研究会報告71

- I 恩智遺跡（第8次調査）
- II 恩智遺跡（第9次調査）
- III 亀井遺跡（第11次調査）
- IV 心合寺山古墳（第5次調査）
- V 中田遺跡（第46次調査）
- VI 東弓削遺跡（第11次調査）
- VII 宮町遺跡（第3次調査）
- VIII 山賀遺跡（第11次調査）

発行 平成13年9月  
編集 財團法人八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2  
TEL・FAX (0729) 94-4700

印刷 ㈱近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
国版 ニューエイジ <70Kg>

